

三好ジオパークの活動に向けて 基本計画書

2020年11月16日 策定

2023年 5月26日 改訂

2026年 4月1日 改訂

三好ジオパーク推進協議会

はじめに

1. 三好ジオパークのテーマ

「動く大地が創った、空へつづく集落と吉野川の流れ」

私たちの住む徳島県の西端にある三好市・東みよし町。この地には、ここでしか見られない特徴的な風景がある。

標高約 1000～2000m 級の山々からなる四国山地。剣山を筆頭にそびえ立つ山々に抱かれ受け継がれた秘境の郷「祖谷」。その郷は、四国の山深く険しい傾斜面に点々とあり、中世以来長きにわたって受け継がれてきた山間部の日本の原風景が色濃く残る地。

何人をも寄せ付けない、断崖絶壁の旧街道「大歩危小歩危」。四国内でも険しい街道であったその道は、いつしか訪れる人々を魅了する国内有数の美峡谷に移り変わる。

悲しみも喜びも与え続ける徳島県民のソウルリバー「吉野川」。増水により度々暴れ川と化したその川は、四国山地をでて讃岐山脈にぶつかり流路を東へ変えることで、災害も恵みもその流域にもたらし、徳島県特有の歴史文化を育んできた。徳島の歴史と切り離せない偉大で愛すべき河川。

「祖谷」「大歩危小歩危」「吉野川」などの色濃い文化に溢れ、心を打つ風景に溢れる地、それが私たちの住む三好市・東みよし町である。

この特徴ある風景を形づくったものは何か…？

それは約 3 億年間にわたる地球の変動であり、その記録はこの地の大地に深く刻み込まれている。

祖谷をはじめとする傾斜地集落の緩斜面の多くは、地質・急峻な地形・多雨な環境によって引き起こされた過去の地すべり跡の上にできた。また大歩危小歩危をはじめとする四国山地の急峻な地形は、プレート運動により地下十数 km の深さから隆起することで作られた。そして徳島県が誇る吉野川は、約 300 万年前から始まった中央構造線の活動（地震）に伴う讃岐山脈の隆起によって池田付近で流れが北流から東流に変わり、現在の流路が生まれ、徳島平野を形作った。

このように、三好の大地にはプレート運動や中央構造線の活動が引き金となって生じた大変動が記録されている。そして、大地の変動と長きにわたって付き合ってきた人々の生活文化を深く感じることができる。

2. ジオパークとは

ジオパークとは、「Geo（地球・大地）」と「Park（公園）」とを組み合わせた言葉で、「大地（ジオ）」をベースとし、それと関わる独自の生態系や歴史文化などのつながりを通して、地球を学び、まるごと楽しむことのできる場所です。ジオパークでは、自然資源、自然災害、気候変動、教育、科学、文化、女性の社会進出、持続可能な開発、地域と先住民の知恵に焦点を当てた活動を行っています。そのため各ジオパーク地域やジオパークを目指している地域は、地質地形の遺産を保全しながら、それらを教育・防災・ツーリズムなどに活用し、持続可能な発展を目指して活動に取り組んでいます。ジオパーク活動は行政や研究機関だけでなく、地域住民や地域の各民間団体が一致団結して取り組み続けることが必要不可欠です。将来にわたってこの地球上で持続可能な暮らしをするために、ジオパークでは国連の持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための取り組みを行っています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



3. 三好ジオパークについて

三好ジオパークのエリアは三好市域と東みよし町域から成り、その大地には、約3億年前から現在までの地球活動の記録を残す地質やプレート運動によってもたらされた地形が点在しています。

三好ジオパークエリア（以下「当地域」と呼びます。）の地質の記録として、約3億年前の浅い海底で息づいていた生物であるサンゴ礁が石化したもの、2～1億年前の海底堆積物や火山噴出物がプレート運動によって地下十数kmに運ばれた過程をもつ岩石、そして約7500万年前の海底で息づいていた生物の生活の痕跡や海底下の様子などがあります。このように、全く異なる時代に異なる過程で形成された地層や岩石は、現在、四国山地や讃岐山脈の構成物として、当地域の大地を作り出しています。この原動力となったもの、それはプレート運動と“大地の切れ目”である中央構造線です。

当地域の四国山地の大部分を構成している結晶片岩は、数千万年前ごろに地下深くで圧力を受けてできた岩石であり、この結晶片岩類が作られる背景にもプレート運動が密接に関係しています。

また当地域北域にある讃岐山脈は、約300万年前から始まったフィリピン海プレートの北西方向への沈み込みに伴う中央構造線の右横ずれ運動によって隆起し、形成されました。

四国山地や讃岐山脈の形成は、その上の地形の変化をもたらしました。讃岐山脈の隆起によって、それまで瀬戸内へ北流していた吉野川は、約120万年前には讃岐山脈によって完全に遮られ、池田付近で東流するようになり、吉野川流域の平野形成に大きな影響を与えることとなります。また、四国山地の高峰や急激に隆起した讃岐山脈の斜面では、降雨や地震によって地すべりなどの斜面災害が頻繁に発生し始めます。斜面災害によって平野へもたらされた土砂は、平野の形成をより後押ししました。

これらの地球の活動が創り出した大地の上で、当地域の独自の文化が育まれました。この地域に特徴的な傾斜地集落は、山地斜面で地すべりが発生することで形成した、比較的緩やかな斜面の上に築かれた集落です。その傾斜地集落は山間部に点在し、中世以降長きにわたり人々が急峻な山間部で暮らして、現在にまで至っています。またそれら集落の交通路として活用された祖谷のかずら橋は、V字谷地形と生態系を活用して生み出された建造物です。さらに池田や辻などで発展した刻みたばこ産業は、山間部で栽培された葉たばこが尾根沿いの街道を歩いて平野部に加工され、吉野川の水運業を活用して徳島平野などに運ばれ発展しま

した。また、吉野川の東流によって中・下流域の藍作や瓦製造業など、当地域や徳島県の特徴ある歴史文化がもたらされました。このように、吉野川流域全体の歴史文化にまで大きく影響を与えることになった大地の変動の記録がこの地に残されています。

この地質・地形の特徴、それに影響を受けた生態系、そして特有の自然環境の中で生まれた歴史文化は三好ジオパークの宝です。三好ジオパークでは、これらのつながりを知り、地域資源を守り活用し、そして自然災害を乗り越えながら、これらの宝を将来につなげるための活動を私たち地域みんなを始め、民間団体、行政、研究者が一体となって行います。「この地を誇りに思い、この地で生きぬく」ために、ジオ（大地）をもとにした地域資源のつながりを存分に活用し、三好ジオパークならではの持続可能な地域社会を実現します。



基本・実行計画の策定にあたって

1. 三好ジオパーク発足の背景と意義

山間部の傾斜地に点々と存在する集落、断崖絶壁の上に築かれた街道（古道）や急勾配の河川に架けられたかずら橋、吉野川と急峻な山々が醸し出す霧とそれが育むお茶、水はけのよい地で暮らし続けるために編み出された農法など、当地域の山間部にある傾斜地集落には、数世紀にわたって継承されてきた伝統文化が今も色濃く残っています。また、山間部で育てられた農作物は池田や辻などの平野に運ばれ、吉野川を活用した水運業により、街の繁栄につながりました。

これらの長きにわたって継承されてきた当地域の伝統文化は、自然と深く共存しながら培われたものです。さらに急峻な地形が他地域との交流の障壁となり、色濃い伝統文化が今まで残される要因となりました。

当地域の自然環境のベースとなったもの、それは地球の変動です。当地域の大部分を占める四国山地を作り出した材料はもともと3億年前の浅海性の礁、2～1億年前の海底堆積物および海底火山噴出物などです。それらはプレート運動によって寄せ集められ、地下深くにもたらされ、その後、隆起し現在の四国山地が形成されました。讃岐山脈を作っている地層は、約7500万年前の海底に堆積した砂や泥の地層です。これらの地層は、約300万年前から始まった中央構造線の活動によって隆起し、讃岐山脈を形成しました。この讃岐山脈の隆起によって、吉野川は当地域で大きく流路を東へ変えることになったのです。

四国山地や讃岐山脈が隆起する中で急斜面が作り出され、頻繁に地すべりが引き起こされました。地すべりが起きた場所は比較的緩やかな斜面になり、後々人々が住むことのできる場所となったのです。そうした土台があって築かれたもの、それがこの地域特有の傾斜地集落です。

このような特徴ある大地の上では多雨な環境、それがもたらす洪水、斜面災害などの厳しい自然条件がもたらされ、その中で当地域の人々は暮らし続けてきました。このことがこの地の唯一無二の伝統文化を形成したのです。そしてその伝統文化を生み出したベースとして、この地特有の地質や地形があったのです。

この自然と共存してきたことで培われた文化やそれらが放つ景観は、古くから当地域以外から訪れた人々を魅了してきました。近年では、東

洋文化研究者のアレックス・カーなどの地域外から訪れた外国人たちや住民などによって地域資源の価値が見出され、現在ではインバウンドや体験型観光を中心に活用されています。とりわけ、大歩危小歩危、祖谷地区のインバウンド観光客の来訪者数は年々増加傾向にあり、2017年には米大手旅行雑誌Travel + Leisureの「2018年に訪れるべき50の旅行地」の一つとして祖谷地区が選定されるなど、目覚ましいものがあります。さらに、受け継がれてきた文化や特色ある地形、その上で育まれた生態系のいくつかは、将来への地域資源の継承のために文化財として保存されてきました。さらに、傾斜地畑で代々受け継がれてきた農法は世界農業遺産認定を受け、農法の継承に向けて活動しています。

しかしながら、この地で継承されてきた暮らしは現在、地域が抱える課題によって失われつつあります。

私たちの地域で最も大きな課題、それは人口の減少です。令和2年国勢調査の人口は37,227人（三好市23,605人、東みよし町13,622人）であり、20年前の70%未満の人口（平成12年国勢調査53,504人）という急速な減少をたどっています。また、高校や大学進学、就職などによって当地域外に転出する若い世代が多くいます。

このような背景から、2020年時点で生産年齢（15～64歳）人口は老年（65歳以上）人口と同程度にまで近づいてきており、今後は老年人口の割合が増加すると予測されています。このことは私たちの地域のマンパワー不足および経済力不足などを引き起こし、環境の維持だけでなく、集落で築かれてきた文化の継承、自然災害を乗り越え続けるためのコミュニティの存続など、それらすべてを危うくさせるような弊害を地域へもたらしてしまうのです。

上記の大きな課題に対して、今、私たちみんなで何ができるでしょうか？その一つの答えとして、私たち自身がこの地域のことを理解し、未来へ繋いでいく取り組みがあります。

私たちの地域は恵まれており、持続可能な地域社会を築くために不可欠な特別な宝がたくさんあります。そしてそれらの宝の多くは、特徴ある三好の大地（ジオ）と密接に関わっているものです。長きにわたり保存、継承されてきた様々な地域資源、自然災害などを乗り越え暮らしてきた先人の知恵や工夫は、まさに持続可能な地域づくりそのものです。この価値を地域のみんなで知り、地域を誇りに思い、将来につないでいくことが、この地域の資源や私たち自身をより魅力あるものにするための方法であり、これを促すことができる方法としてジオパーク活動があります。

以上のような背景から、私たち三好ジオパークのビジョンとして「三好の大地に根ざした暮らしを誇りに想い、生きぬき、未来へつなぐ」を主軸に掲げ、持続可能な地域社会の構築を地域のみんが一体となって目指します。

当地域の多様な歴史文化は、特徴ある三好の地質・地形がベースとなって育まれたものが多くあります。「三好の大地に根ざした暮らしを誇りに想う」とは、大地そのものや大地と関わる地域資源の価値を地域のみんなやこの地のファンの方々一人ひとりがジオパーク活動を通して知り、誇りに思うことです。そして、地すべり・崖崩れなどの斜面崩壊、吉野川の洪水、中央構造線や南海トラフなどの地震などの大地の変動に見舞われるであろうこの地の自然の脅威に対して、ジオパーク活動を通して「生きぬく」方法を共に考え、見出していきます。さらにこのような活動を推進・発展させ、当地域らしい特徴を「未来へつなぐ」取り組みを進めていき、持続可能な地域社会のあり方をみんなで考え、活動していきます。

2. これまでの取り組みとのつながり

①教育（みんなが地域を誇りに想い続けるために）

当地域には、祖谷地区や大歩危小歩危、美濃田の淵などをはじめとする他に類を見ない地質地形・生態系・歴史文化などの地域資源に恵まれています。この地域資源を活用し、様々な教育活動が行われてきました。

当地域のことを知るための教育活動として、学校教育では、各校での地域学習が行われてきました。地域学習が継続されてきた背景の一つとして、大学進学や就職に合わせて当地域外へ若い世代が流出してしまうことが挙げられます。地元を離れる私たちの子や孫達に郷土に誇りを持ってもらいたい、いつかは地元に戻ってきてもらいたいという想いがあります。また、地域の宝である子どもたちが、学校・家庭・地域で大切に育まれ、豊かな人間性や社会性を身につけて健やかに成長してもらいたいという想いもあります。これらより、第2期三好市教育振興計画、第2期東みよし町教育振興計画には、ふるさと学習、地域学習の推進が打ち出されています。

また、学校教育以外の生涯教育については、郷土史研究や自然観察などの多種多様な文化活動が個別に行われてきました。

このように都市部ではすでに失われてしまった特徴ある地質地形や生態系などの天然資源や人的資源が当地域にはあり、様々な活動を通して活用されてきました。しかしながら、私たちの地域が抱える“人口減少”によって個別におこなってきた活動が衰退し、これらの大切な地域資源が失われてしまう状況に差し迫っています。

今後、加速する人口減少問題を当地域なりの手法で切り込んでいくためには、当地域の持つ地域資源の付加価値を私たちが見出し、この地域全体の魅力を世界中の多くの人を知り、訪れてもらえるような取り組みを推進することが大事です。そのためには、何かをベースや接点とし、地域資源同士をつなげることが必要です。それをつなげるベースや接点として、大地（ジオ）があります。そして、それを促す活動として、特徴ある地質・地形を包括した地域資源や地域社会のありようについて学ぶ「ジオパーク教育」があります。ジオパーク教育により、地域資源の価値を私たち一人ひとりが知り、誇りに思うことが当地域で暮らし続ける原動力となり、持続可能な地域社会の構築を促すことができます。

② 景観保全、文化の保全（文化財、世界農業遺産）

◆ 文化財としての地域資源の保全・活用

当地域には特徴ある地質地形、生態系、歴史文化が多様にあります。当地域では、これらの地域資源のうちのいくつかを指定文化財として保存・活用してきました。このうち、「祖谷の蔓橋」（祖谷のかずら橋）や「三好市東祖谷山村落合」（落合集落）や「大歩危小歩危」や「美濃田の淵」などが、当地域のツーリズムの主軸としても活用されております。

また、剣山系および祖谷溪などをエリアとする剣山国定公園や、讃岐山脈中腹にある箸蔵県立自然公園などの自然公園もあり、特有の地形地質や生態系が保全されています。

ジオパーク活動を通して、これらの文化財や自然公園、そして他の地域資源のつながりを通じた当地域全体の地域資源の保存や活用について私たち一人ひとりが考え、将来へ残す（受け継ぐ）取り組みを推進していきます。

◆ 世界農業遺産

私たちがこの山間部の傾斜地で暮らしきた中で、現在まで継承されてきたものの一つに独特の農法「傾斜地農法」があります。当たり前のように継承してきた農法ですが、他の地域にはない特徴あるものです。その価値が認められ、にし阿波地域（美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町）の特徴的な傾斜地畑での農法が2018年3月に「にし阿波傾斜地農耕システム」として世界農業遺産に認定されています。この傾斜地農法は急峻な山地の中に点在する緩傾斜地で生まれた農法で、傾斜面に合わせた農具や斜面の向きに合わせた農作物の栽培など、特有の農法が特徴です。傾斜地緩斜面は過去に発生した地すべりなどの斜面崩壊によって作られたものであり、当地域をはじめとするにし阿波の特徴ある地質・地形があったことでこの農法が生まれ、継承されてきました。

この特徴をジオパーク活動で活かし、世界農業遺産事業を組み合わせた活動を展開することにより、傾斜地農法に関わる保全や文化の継承に取り組むことが可能です。

世界農業遺産（GIAHS）

世界農業遺産とは、伝統的な農林水産業を営む地域（農林水産業システム）の中で、世界的に重要と認められる地域を、国際連合食糧農業機関（FAO）が認定する制度です。

ユネスコにより認定される世界遺産は、基本的に現状を変えない「静的保全」に対して、世界農業遺産では変化しながら保全していく「動的保全」を行なっています。

その対象は、伝統的な農林水産業と、それを取り巻く人・文化・食・景観などの全てを含む農林水産業システムです。時代や環境の変化に適應させながら、「生きた遺産」として保全し、未来へつなげる活動を行なっています。

2020年3月末時点では、世界22カ国59地域、日本では11地域が認定されています。

③ 防災

当地域やその周辺の急峻な山間部には傾斜地集落が点在しており、昔から現在に至るまで、地すべりなどの斜面災害を乗り越え、暮らし続けてきました。そのため、私たちの暮らしの感覚の中に”山は崩れるもの”という意識が根付いています。同様に、吉野川による洪水も同じです。吉野川の上流域の年間降水量が3000mmと多いため、吉野川の中・下流域は古代から洪水被害に悩まされました。

これら2つの自然災害は、短期間（数年あるいは数十年レベル）で発生し続けてきたために、私たちの中で半日常的な出来事として捉えられています。

この地で起こる数百年あるいは数千年レベルの長期的な自然災害については地震が挙げられ、2つ地震によるリスクが考えられています。一つは三好地域北域に東西方向に貫いている中央構造線活断層系で、直下型地震が懸念されています。もう一つは約100年に一度引き起こされる南海トラフ地震による揺れや斜面災害などです。

短期的・長期的に起こる、この地特有の自然災害に対して私たち一人ひとりが“生きぬく”ためには、三好の大地の特徴を理解することは必要不可欠です。私たちがジオパーク活動を通じて、大地の活動が引き起こす自然の脅威と恵みの関係性や自然現象のメカニズムを知り、防災意識を高めていきます。

④ 観光

私たちが暮らしている三好ジオパークエリアの風景。私たちにとっては見慣れた風景ですが、古くから他の地域から訪れた人々を魅了する風景であり、それがこの地域の観光のベースとなっています。

当地域やその周辺には、自然と共存してきたことで培われた文化やそれらが醸し出す景観が遺されています。四国内でも有数の観光地として知られる「大歩危小歩危」は、四国山地の中でも非常に急峻な地形を有する場所であり、そこへ豊富な水を湛える吉野川が流れることによって成立する景勝地です。また、「祖谷のかずら橋」「落合集落」などの祖谷地区に点在する観光地も、傾斜地集落があることで築かれた文化の一部です。それらの傾斜地集落は、地すべり地形の上に築かれたものです。

近年では、移住者や研究者らをはじめ、観光地域づくり団体などによって当地域の地域資源の価値が見出され、大歩危小歩危や祖谷地区を中心にインバウンドや体験型観光の地として注目されています。

山間地が外国人にとっての観光対象となっているのは、国内でも稀なケースです。来訪者のうち、2割近くが外国人旅行者であり（平成31年度かずら橋渡橋データ）、うち、アジア圏観光客が9割近く滞在し、宿泊やそばうち体験などの生活文化体験などが主に行われています。

自然を活用したアクティビティーも盛んで、大歩危小歩危周辺の吉野川では急峻な地形が作り出す激流を活用したラフティング、池田ダム湖

では静水面を活用したウェイクボード、剣山周辺の高峰ではトレッキングなどがあります。

このように、大地が密接に関わった自然景観やそこに暮らしている人々の営みに触れることのできる体験が、国内外のツーリストの目に魅力あるものとして映っています。

三好ジオパークの様々な文化的要素の背景には、大地が深く関係しています。しかしながら、現在のツーリズムは文化的要素の背景のみクローズアップされており、大地との関係性や大地の要素までひっくるめたツーリズムには至っていません。

今まで築き上げてきた当地域の観光とジオパーク活動を組み合わせることで、大地という観点を組み入れた新しいツーリズム（ジオツーリズム）を作り出し、既存のツーリズムにさらに深みを持たせることができます。また、今まで観光資源が乏しいと思われていた地域においても、ジオツーリズムという観点から資源の発掘を私たちが一丸となっていくことで、新たな観光資源を生み出すことができます。そうすることで、今までの観光スポットだけでなく、注目されていなかった地域資源にも付加価値をつけることができ、地域内を周遊することが可能となります。

3. 三好ジオパーク

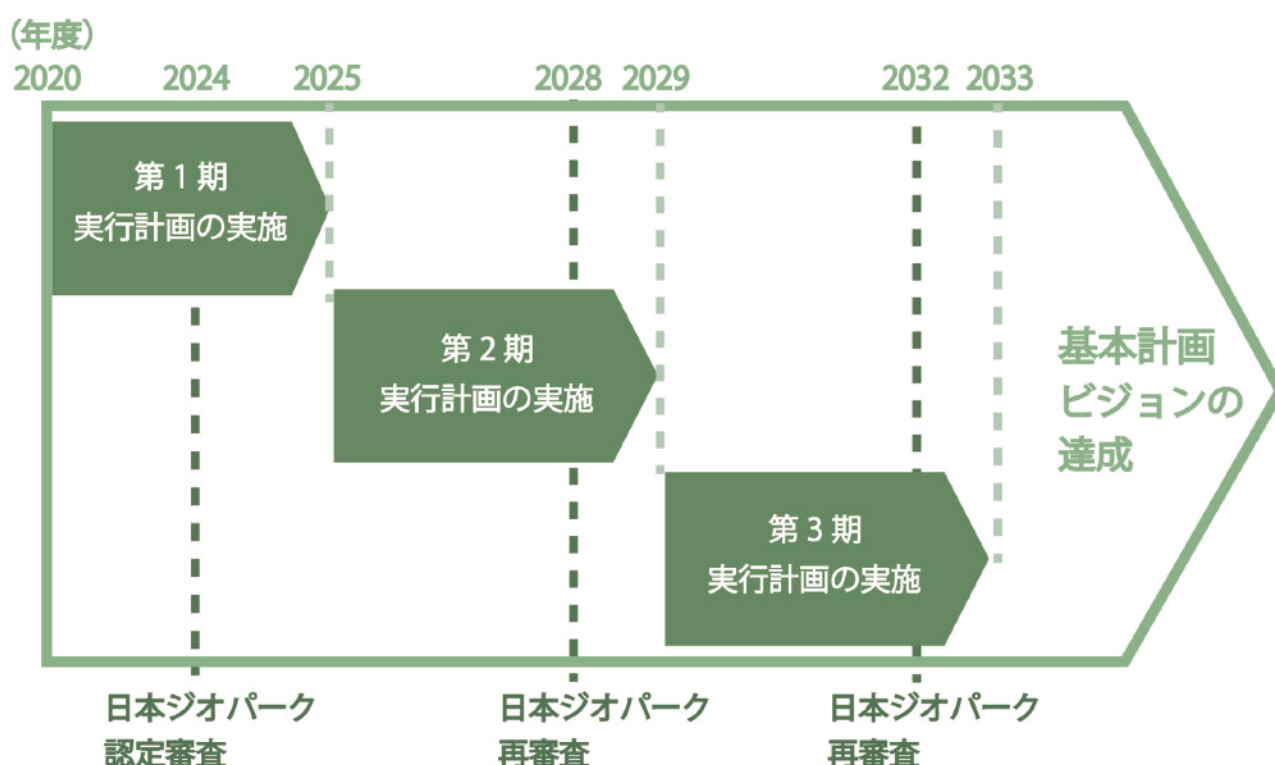
基本計画策定の位置付け

.....

基本計画は私たちがこれから推し進める三好ジオパークの目指す指針を表すものです。当地域内のジオ（大地）やジオとつながりのある地域資源の特徴を私たち地域住民、民間団体、研究機関、行政が正しく理解し、保全し、また教育やツーリズムや防災など多岐にわたる事業において、協働で活用し続けることを目指します。そして、この地を私たち一人ひとりが誇りに思い、次世代につなぎ、将来にわたって当地域で持続可能な暮らしをするための指針として、本計画を策定します。

4. 基本計画・第1期実行計画の計画期間

三好ジオパークの基本計画は今後10年余りを見据えた中長期的に目指すべき姿を示し、また、第1期実行計画は2024年度の日本ジオパーク認定を目指し短期的な活動方針を示します。さらに第2期実行計画では、ユネスコ世界ジオパーク及び日本ジオパークの活動状況や地域の状況を踏まえて、より発展的な形に改訂する予定です。



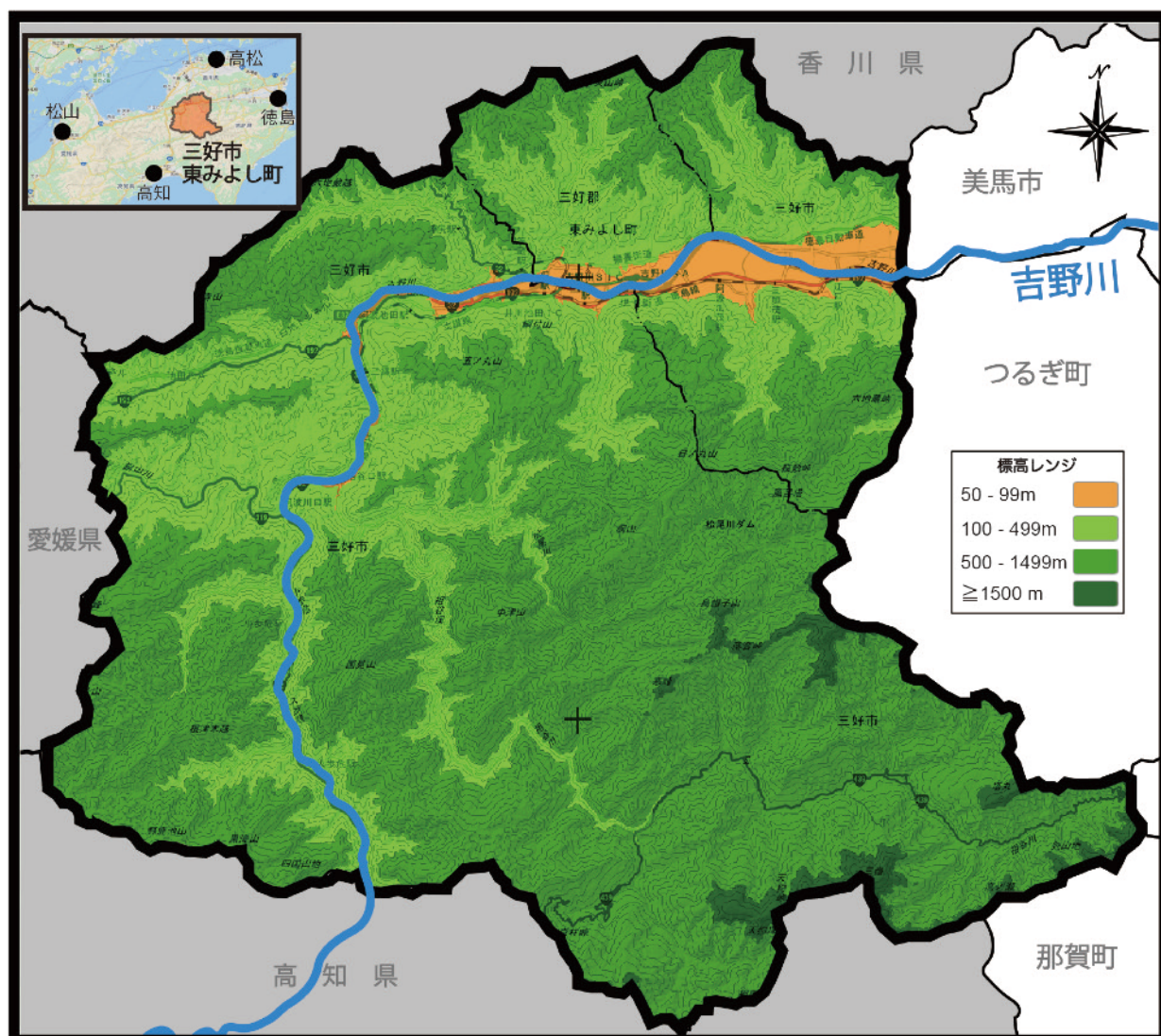
三好ジオパークを取り巻く環境

1. 自然環境

① 位置

当地域は、徳島県の最西端に位置し、西は愛媛県、南は高知県、北は香川県に接し、四国のほぼ中央に位置しています。そのため、昔は他国との攻防の最前線の地であり、また四国中央部における交通の要衝としても栄えました。

当地域は東西に約39km、南北に約36kmに広がり、面積は843.9km²（三好市721.42km²、東みよし町122.48km²）です。2006年3月1日に三野町、井川町、池田町、山城町、西祖谷山村、東祖谷山村の6町村が合併し「三好市」が、三好町、三加茂町の2町が合併し「東みよし町」が誕生しました。



②地勢

当地域の南域は、1955mの剣山を筆頭に、1000mを超える山々が連なる四国山地が広がっており、東から剣山（1955m）、高ノ瀬（1740m）、三嶺（1893m）、天狗塚（1812m）と四国の背稜の尾根が西方へ連なり、高知県との県境となっています。この背稜部の北側には、烏帽子山（1669m）、寒峰（1604m）、中津山（1446m）、国見山（1409m）などの高峰がそびえています。これらの山岳の山上付近では、平坦地（小起伏面）がところどころ点在し、黒沢（池田町）や多美（井川町）などの特徴ある湿地・湿原が広がっています。四国山地は概ね急峻な斜面からなっていますが、斜面の途中の所々に比較的緩やかな斜面や平坦な場所が点在しています。このような急斜面途中の緩斜面は地すべりによってできたもので、その上に集落が形成されています（傾斜地集落）。

当地域の北域には讃岐山脈があり、大川山（1042m）を筆頭に、500～1000mの山々の尾根がほぼ東西方向に連なっています。讃岐山脈の南麓部分と讃岐山脈を貫く河川の西方傾斜面には地すべりによる緩斜面が多数あり、その上にも傾斜地集落が点在しています。

当地域のまん中には、吉野川が流れています。吉野川は、大歩危小歩危付近では急峻な四国山地を貫くように北流し、典型的なV字谷を作り出しています。またこの付近の吉野川には、数多くの瀬と淵が点在しています。吉野川は池田町付近まで北流すると、讃岐山脈によって流路が阻まれるため、大きく流れを東へ変えます。讃岐山脈と四国山地の間には、吉野川に沿って東西方向に平野が形成されています。吉野川の兩岸には様々な高さの河成段丘が形成され、また吉野川北岸では扇状地が発達しています。

当地域はほとんどが林野であり、森林比率は88.1%と大きいのが特徴です。その中での天然林面積は約4割ほどとなっています。当地域での人の居住エリアは、吉野川の沿いの平野や山間部緩斜面です。

特徴的な自然環境を有する当地域の中には、剣山を中心とする山岳があり、大歩危・小歩危および祖谷溪周辺とともに剣山国定公園に指定されています。また讃岐山脈側南麓域の三好市と東みよし町にわたるエリアは箸蔵県立自然公園として指定されています。

特有の地形と、その上で育まれた生態系が失われずに残されてきたこと、これが現在の当地域の風景の根源です。そして、その自然と密に共存し生きぬいてきた傾斜地集落の人々、平野で自然の恩恵を商いに活用

した人々などの努力が、この地の文化を生み出し、現在の当地域のツーリズムや産業などに大きく影響を与えています。

③ 河川

当地域には、四国を代表する一級河川、吉野川が高知県側から流れこみ、徳島平野へ向かって流下しています。またその吉野川には、四国山地や讃岐山脈側から多数の支流が注ぎ込んでいます。

◆ 吉野川

吉野川は、瓶ヶ森（愛媛・高知県境）を源流とする全長194km、流域面積3,750km²の一級河川で、四国では最も流域面積の広い河川です。当地域では、高知県大豊町から四国山地を貫くように北流する形で流れ込んでいます。吉野川の北流は当地域の池田町付近まで続き、そこから90度流路を東へ変え、徳島平野へ向かって流下します。

吉野川上流域の年間降雨量は2500～3000mmの多雨な地域で、降雨は夏季に集中してもたらされるため、突発的な増水が頻繁に発生するという特徴があります。そのため、吉野川中・下流域では、幾たびも洪水による被害がもたらされてきました。このことが、関東の利根川、九州の筑後川と並ぶ「日本三大暴れ川 四国三郎」として、吉野川を名高くさせる要因となりました。

その一方で、吉野川流域の北岸にあたる讃岐山脈南麓の平野は、長年水の確保に悩まされてきました。同様に、讃岐山脈北麓の香川県側でも年間降雨量が少なく、長年水の確保に悩まされてきました。

このような吉野川の治水・利水の改善を目的として、1966年には吉野川総合開発計画（基本計画）が定められ、1968年に当地域の池田町に池田ダム建設工事が着工、1975年に完成しました。ダム建設とともに香川用水、吉野川北岸用水の工事も着工し、1975年には香川用水が、1990年には吉野川北岸用水がそれぞれ完成しました。これらの用水は、水の確保に苦勞してきた讃岐山脈麓に住む人々にとって大切な水源となっています。

このように、吉野川は徳島県や香川県の人々の生活と深くつながりのある河川です。

◆ 主な支流

剣山を水源として吉野川に流れ込んでいる祖谷川は、全長約54km、流域面積36.6km²の川です。祖谷川は西祖谷山村善徳あたりで流路を西か

ら北へ変え、流下し、最終的に吉野川へ注ぎ込んでいます。祖谷川の東から西へ流下する流域には、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている「落合集落」、国の地すべり対策事業がなされている善徳・今久保地区などの傾斜地集落が数多く点在し、観光地としても名高い「祖谷のかずら橋」があります。南から北へ流下する流域では特に急峻な地形を呈しており、河川の蛇行が見事な「ひの字溪谷」が景勝地として知られています。祖谷川は水量の豊富で急峻な地形を有しているため、四国内で最も水力発電所が多く設置されており、6箇所あります。

銅山川は愛媛県の冠山を水源とし、全長約64kmで東方向へ流れ、最終的に三好市山城町で吉野川と合流します。この河川の上流部には別子銅山があり、銅鉱石をはじめとする鉱石が多く産出しました。このような特色のある銅山川では昔、砂金取りが行われていました。



讃岐山脈側から吉野川に流れ込んでいる三野町の河内谷川は、大川山を水源とする全長8kmの河川で最終的に吉野川と合流します。河内谷川の下流域では扇状地地形が形成され、伏流水となります。

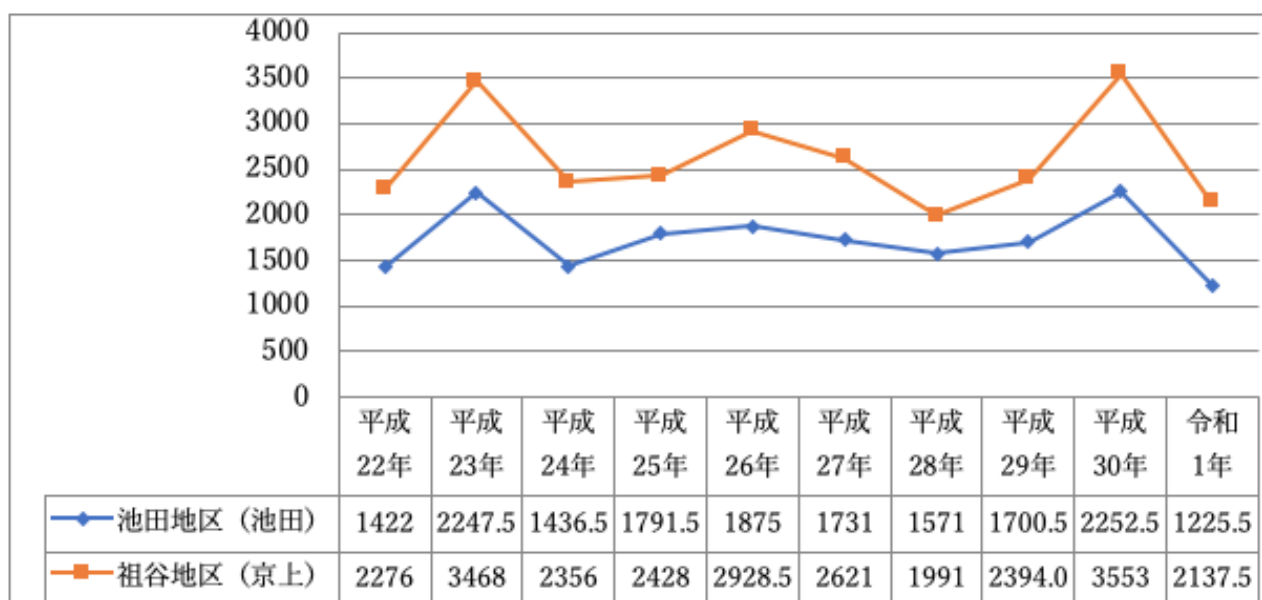
他にも、藤川谷川、白川谷川、松尾川、馬路川、鮎苦谷川、井内谷川、里川谷川、加茂谷川、山口谷川、馬木谷川、小川谷川、黒川原谷川、滝谷川など、多くの支流があります。

④ 気候

当地域は山間部や平野部の地形が影響し、気候に大きな違いがみられます。ここでは平野部に位置するアメダス池田観測所のデータと、山間部に位置する京上観測所のデータを基に気候について述べます。平成21年から平成30年までの平均年間降水量は、祖谷地区が約2600mmであるのに対し、池田地区は約1740mmと少なくなっています。これは四国山地に太平洋側から来た雨雲があたり、祖谷地区周辺で多くの雨を降らすためです。また、祖谷地区は日本海側と類似した気候であり、1月、2月は積雪することもあります。祖谷地区の平均気温は約12℃で、池田地区の平均気温は約14℃です。

◆エリア内観測地点の年間降水量

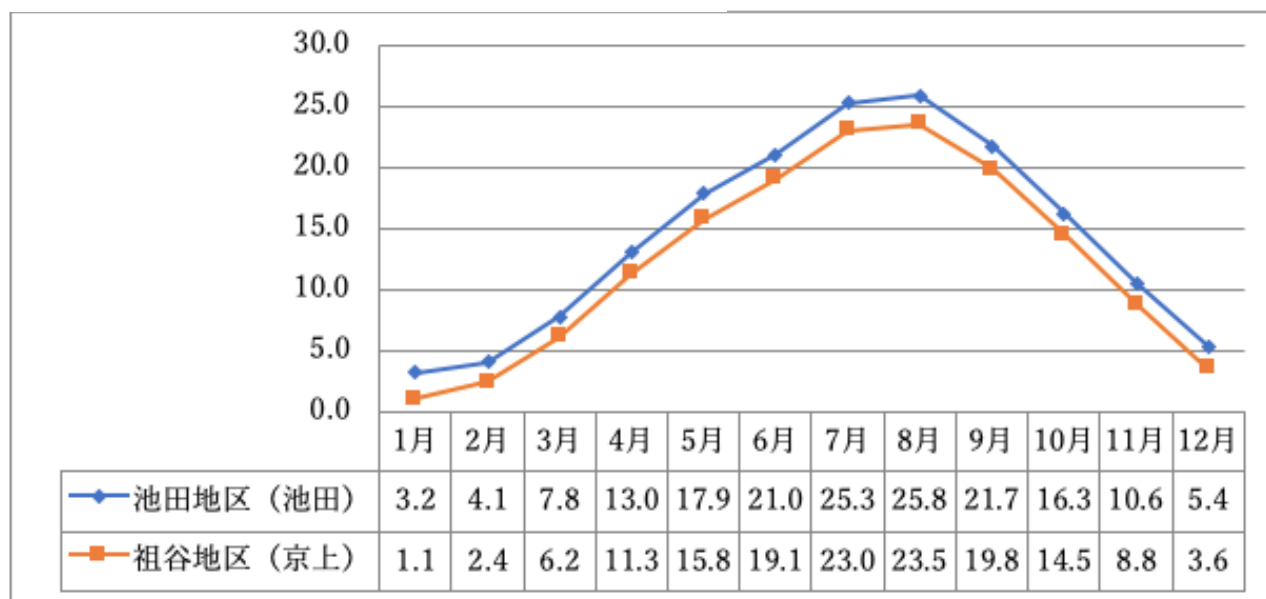
単位：mm



（資料：気象庁 徳島県平成21年（2009年）から平成30年（2018年））

◆エリア内観測地点の月別平均気温

単位：℃



（資料：気象庁 徳島県平成 21 年（2009 年）から平成 30 年（2018 年）までの平均値）

⑤ 自然災害

当地域では、地すべりなどの斜面災害、吉野川の増水に伴う洪水（浸水）、地震に伴う土地の振動など、地質・地形に密接に関連する自然災害を度々被ってきました。

◆斜面災害

当地域内の南域に広がる四国山地および北域に連なる讃岐山脈では、地すべりをはじめとする斜面災害が有史以前から現在に至るまで頻繁に発生しています。とりわけ四国山地は、全国でも有数の地すべり地帯として知られています。四国山地は、泥質片岩などの一方向に剥離しやすい結晶片岩類や地すべりを誘発しやすい粘土鉱物を生成する御荷鉾緑色岩などの地質、急峻な地形、年間降水量約2600mmの多雨な環境など、斜面災害を頻繁に起こしやすい条件となっています。そのため、山地隆起に伴って生じる亀裂（破碎）により、地すべりや土石流などの斜面崩壊が頻繁に引き起こされてきました。とりわけ地すべりに関しては大規模な災害が過去に何度も起こっています。近年では、1965年に東祖谷山村大西で深層崩壊※1「大西のザレ」が発生し、12万m³もの土砂が流出しました。また、1999年に西祖谷山村善徳地区のとびのす谷で土石流が発生し、ホテルの一部が崩壊、土産物屋が全壊したほか、県道

が160mにわたり土砂で埋没しました。そして、2018年度に発生した平成30年7月豪雨では、山城町の白川谷川や藤川谷川を中心に多くの箇所で見られ、表層崩壊※2が起きました。また、現在進行中の地すべり箇所も当地域内には多数あり、なかでも西祖谷山村の善徳・今久保地区、有瀬地区については国土交通省の直轄地すべり対策事業、そして東祖谷山村の檜尾地区、麦生土地区、西山地区については、林野庁の直轄地すべり防止事業が行われています。

讃岐山脈側では、四国山地と比較すると年間降水量が少ないですが（1500mm以下）、2004年台風21号に伴う降雨により、池田町野呂内地区では鮎苦谷川へ流れ込む多数の小河川で大規模な土石流が発生しています。

※1 深層崩壊

斜面崩壊のうち、すべり面が表層崩壊より深いところで発生するもの。表土層だけでなく、下部の地盤までもが崩壊土塊となる比較的規模の大きな崩壊現象。

※2 表層崩壊

斜面崩壊のうち、表層部が原形をとどめず崩落するもの。一般に急傾斜地に見られ、崩落する速度が速く、強風化岩などで多く発生する。また、豪雨等によって引き起こされることが多い。

「大西のザレ」から垣間見る、当地域の地形や自然災害と地名について

地名は大地のネームプレートである。当地域内では、この地域に特有の自然災害が起こった箇所（もしくは起こりやすい箇所）や特徴的な地形が数多くあり、それらの地は、古来、人々が特有の地名として名付け、遺してきた。「大西のザレ」もその一つであり、「ザレ」とは、「崩れる」の意味で山腹の斜面崩壊の現象を指した言葉である。また、観光名所として名高い大歩危小歩危の「ボケ」も「崖」を意味する言葉である。

◆吉野川の増水に伴う洪水

当地域を流れる一級河川の吉野川は、かつては毎年のように氾濫し流域の人々を苦しめてきました。とりわけ、池田町付近から下流側では流域に平野が広がり、その上に多くの街並みが築かれたため、幾度となく氾濫の被害を受けてきました。

近年の洪水被害の例では、2004年台風23号が挙げられます。この洪水は、浸水面積329.5ha、床上浸水74戸、床下浸水146戸もの被害をもたらした。戦後最大の洪水災害被害となりました。

◆地震

当地域には、北域に中央構造線活断層系が東西方向に貫いており、池田断層、箸蔵断層、三野断層とそれらに付随する断層（例：芝生衝上断層）があります。これらの活断層の活動は、右横ずれ運動に讃岐山脈（断層北側）が隆起する特徴があります。池田断層は右横ずれの平均変位速度が7m/千年程度、三野断層は8～9m/千年程度と考えられており、北側の隆起変位量は数十cm/千年程度と見積もられています。古文書などによる中央構造線由来の直下型地震被害の記録は残されていませんが、三野町での三野断層トレンチ調査に伴う断層の最終活動時期は16～17世紀ごろと考えられています。

また、約100年に一度発生する南海トラフ地震による地震災害も当地域は経験してきました。古文書に残されている記録として、1854年12月24日に発生した安政南海地震により、西祖谷山村にある善徳地区や国見山山麓で地震による揺れが要因となる斜面崩壊が発生したという出来事が残されています。

このように当地域では、数年～数十年単位で発生する斜面崩壊や洪水などの自然災害、百年単位で起こる南海トラフ地震、そして千年単位で生じる可能性のある中央構造線活動による直下型地震などの様々な自然災害と遭遇し、人々はその脅威を乗り越えて暮らし続けてきました。このことは、中世以来の集落における多くの民家が傾斜面に工夫を加えて築かれ、代々暮らし続けてきたことから窺うことができます。このように、当地域で暮らしてきた先人たちは、この特有の地質地形や自然の脅威と共存しながら持続可能な地域を受け継いできたのです。

⑥生態系

当地域には、西日本第二の高峰である剣山（1955m）をはじめとする1000mを超える山々が四国山地側に存在しています。また、500～1000mの尾根を連ねる讃岐山脈が当地域の北域にあります。四国山地・讃岐山脈の山々が当地域の広範囲を占めているため、全面積のうち88.1%（74,372ha）は森林であり、その約6割は人工林、残りの4割は天然林が広がっています。人工林のほとんどは杉やヒノキなどの針葉樹、天然林のほとんどは広葉樹で構成されています。

◆当地域の植生について

当地域には、急峻な山岳からなるエリア、その間を縫うように流れる溪流、そして一部の山頂では平らな地形（小起伏面）があるなどの特徴

的な地形があります。そのため、その地形や環境に応じて、草地植物、剣山山頂周辺の高山植物、溪流沿い植物、湿地植物などの特色ある植生が分布しています。

【草地植物】

剣山山頂付近の標高1700m以上の稜線部分では、ミヤマクマザサなどのササ草原やコメツツジなど落葉低木が広がっています。また、塩塚高原などの稜線部ではススキが広く分布しています。これら稜線部に広がるササやススキは、風あたりの強いところに生える風衝草原です。

【剣山山頂周辺の高山植物】

標高1000m以上は冷温帯域にあたり、亜高山帯の植物が分布しています。標高1000～1500m付近ではブナ林などの亜高山帯の樹木が分布しており、1650～1780m付近ではシラビソの変種であるシコクシラベ群落が小規模ながら分布しています。

【溪流沿い植物】

急峻な勾配をなす四国山地の河川では、川幅の狭い溪谷が点在しています。このような溪谷では降雨により増水を頻繁に繰り返すため、その周辺に蔓延る植物は度々浸水し流されます。このような地に生える植物の中には、この流水に耐える特徴を持つものがあり、溪流沿い植物と呼ばれます。溪流沿い植物は増水する環境に対応するために、小型化・細葉化する特徴があります。当地域では主に、大歩危小歩危付近を流れる吉野川、その支流である祖谷川、松尾川、銅山川などで溪流沿い植物が観られ、代表的なものでは、キシツツジ、ホソバイブキシモツケ、ナガバシャジンなどがあります。

【湿地植物】

当地域の四国山地側の山頂付近では、所々に頂上付近が平坦な地形（小起伏面）があります。この地形上には、黒沢（池田町）に代表される湿原が形成されている箇所もあります。この黒沢湿原は、雨水と地下水で涵養されて植生が維持されている特徴のある湿原で、環境省の「日本の重要湿原500」にも選定されています。このような湿地帯に生息する植物として、ミズゴケ類群落、サワギキョウ（多美湿地のみ生育）などがあります。

◆当地域の動物について

当地域の動物については、当地域特有の自然環境に適応した生態系を所々で見ることができ、とりわけ河川や山間部でその様子を伺うことができます。

【河川】

当地域の河川では、鮎やアマゴなどが生育しています。吉野川では、豊富な水量とその水が運搬する土砂により鮎の餌となる藻が繁殖するため、良質な鮎の生育場所をもたらしています。また、池田ダムより上流の吉野川には多数の瀬が点在しており、この自然条件が体長の大きな鮎の生育を促しています。

【山間部】

野鳥については、風衝草原を生育環境とするセッカやホオアカなどの鳥類が塩塚高原で、ヒバリやタヒバリが腕山の草原などで確認されています。黒沢湿原などの湿地では、水辺に生息する野鳥であるアオサギやキセキレイが生育しています。

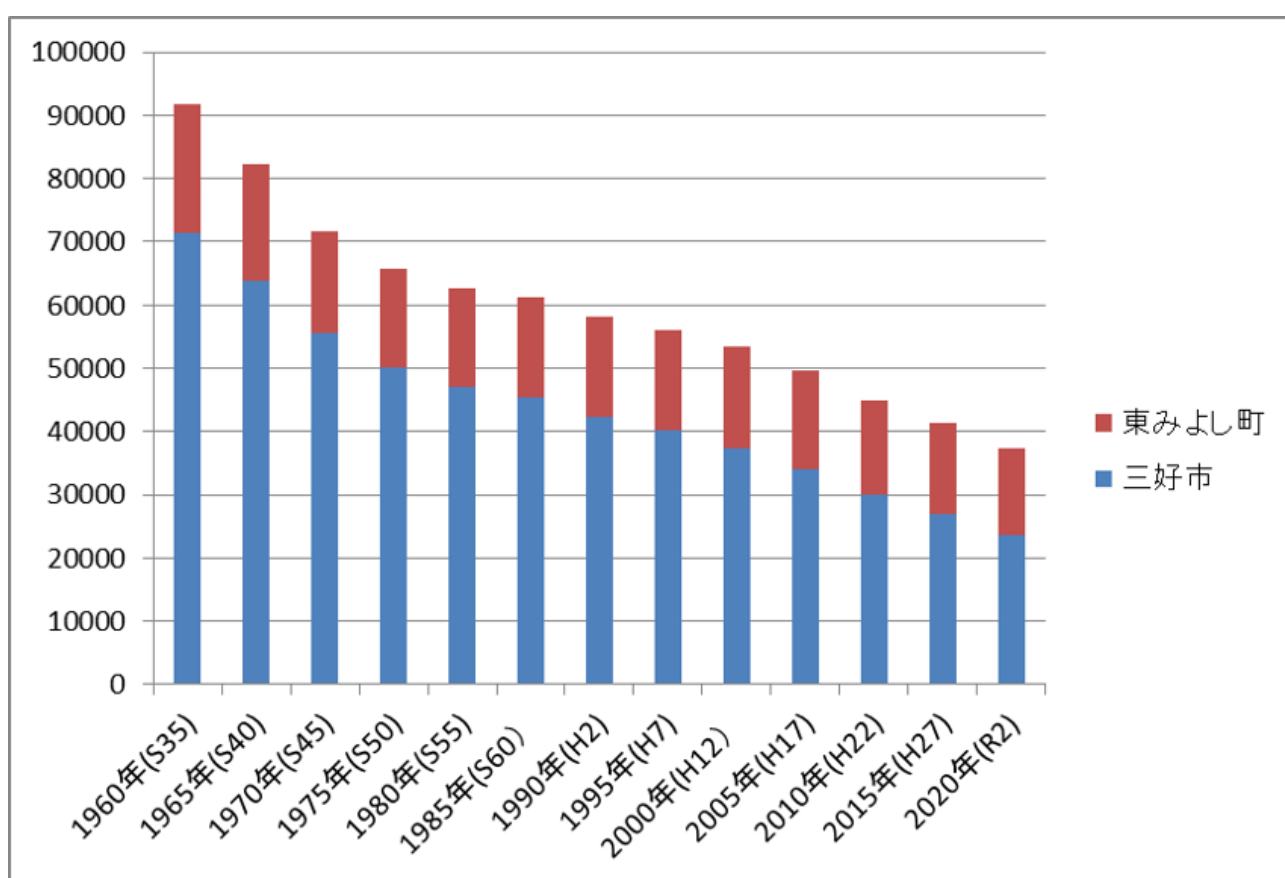
また生態系の中でも上位にあたるツキノワグマや猛禽類のクマタカなども当地域には生息しており、どちらも希少種として知られています。特にツキノワグマについては、現在四国では唯一、剣山系周辺のみに16～24頭数（2019年12月時点）生息していると推測されています。

国の特別天然記念物に指定されているニホンカモシカ等の珍しい動物も山間部では生息しております。しかしながら、当地域の山間部で増殖しているニホンジカの生育域拡大に伴い、ニホンカモシカの生育領域は変化し続けています。

2. 社会的環境

① 人口動態

当地域の人口動態については、1960年時点で91,770人（昭和35年国勢調査）に達していましたが、現在では37,227人（令和2年国勢調査）となっています。とりわけ1960年から1975年までの当地域の人口減少は5年ごとに約1割ずつ減少するという急速な人口減少を示しており、その中でも東・西祖谷山村については、この15年間で約半数にまで減少しました。



また、三好市と東みよし町の「人口ビジョン」では、今後も人口は減少する見込みで、2030年には老年人口が生産年齢人口を上回ると推測されています。さらに、国立社会保障・人口問題研究所によると、2060年には14,437人（三好市6,915人、東みよし町7,522人）まで人口が減少すると考えられており、今後、人口減少とともに超高齢化社会が到来するという推計が出ています。

また、趨勢人口の年齢構造の推移データによると、2025年の現役世代（15～64歳）人口は45.8%、高齢世代（65歳以上）人口は45.1%で

推計されており、近い将来には一人の現役世代が一人の高齢世代を支える時代に突入することがうかがえます。

更に、当地域内の集落の状況については、2015年に徳島県内の過疎地域を対象に実施した調査（当エリアは三好市全域と東みよし町の旧三好町域）によると、集落数543（三好市442、東みよし町（旧三好町）101）に対し65歳以上が50%以上を占める限界集落が194（三好市178、東みよし町16）で、そのうち10年以内に消滅する可能性がある集落が21（三好市18、東みよし町3）という状況です。これらの集落では後継者不足等の影響により集落やコミュニティの維持が難しい状況にあります。

また若い世代の人口流出も拍車をかけており、地元高等学校から進学や就職に伴いこの地域を離れる若い世代が増加しています。地元高校の資料によると、2017年度には154名（地元出身卒業生の89%）、2018年度には125名（93%）、2019年度には119名（93%）が三好地域外へ転出をしています。

このように当地域の人口減少については、1960年以前からすでに始まっており、自然減だけでなく、地域から他地域への転出・移住も人口減少を加速させる大きな要因となっています。人口減少の問題は、点在する集落の維持を逼迫し、これまで継承されてきた文化や守られてきた自然などを存続していく上で深刻な地域課題の一つとなっています。

その一方で、近年では県外から三好地域へ移住する人々が増えており、2020年度には207人（三好市158人、東みよし町49人）、2021年度には184人（三好市148人、東みよし町36人）となっています。移住の動機としては「自然環境への魅力」という回答が一番多く、当地域の自然環境に魅力を感じ、移住する方が近年増えつつあります。

当地域には他地域と同様に深刻な人口減少の課題がありますが、大歩危小歩危、祖谷地区をはじめとした、他に類を見ない地質地形・生態系・歴史文化などの地域資源に恵まれています。それらの良さを感じ、都市部などの地域外から移住する方が少しずつ増えています。今後、加速する人口減少問題を当地域なりの手法で切り込んでいくためには、昔から培われ継承されてきた傾斜地集落での暮らし、吉野川を活用した文化など、「この地にしかない自然とそれらと共存してきた人々」の素晴らしさについて、まず地域住民が目を向け、理解し、誇りを持つことが持続可能な地域社会を構築するために必要不可欠です。その構築のための手法の一つとしてジオパークがあります。これは、特徴ある地質地形をベースとし、地域資源の保全・活用を行い、持続可能な地域を築きあげ

るためのプログラムです。当地域でジオパークを活用することによって、地域住民や当地域のファンが再度この地の良さに気づき地域愛の醸成を促すことができます。さらに、ジオパーク活動を通して、地域内外の多種多様な人々とのつながりを持つことにより、三好らしい、持続可能な地域社会の構築を考え、取り組むことが可能となります。

②文化（地域資源）

当地域は、徳島の最西端に位置する地理的条件、また山間部緩斜面に築かれた集落や交通の要所・葉たばこの集積及び加工によって栄えた平野の商業地域、原始・古代から中世・近世にかけての遺跡など、特徴的な自然環境の上で育まれた多様な歴史文化があります。

◆三好の文化財

当地域の特徴ある自然や歴史文化によって育まれた地域資源の多くは文化財として指定・選定・登録されており、2022年6月1日時点での総件数は225件（うち、指定・選定が166件、登録が57件・記録が2件）にも上ります。指定文化財のうち、国指定の文化財が19件、県指定の文化財が41件ありますが、その中でも国指定「大歩危小歩危（名勝・天然記念物）」、「加茂の大クス（特別天然記念物）」、県指定「美濃田の淵（名勝・天然記念物）」、「太刀野の中央構造線（天然記念物）」、「祖谷、三名の含礫片岩（天然記念物）」、「黒沢の湿原植物群落（天然記念物）」などの自然、国選定「三好市東祖谷山村落合（重要伝統的建造物群保存地区）」、国指定「祖谷の蔓橋（重要有形民俗文化財）」、「丹田古墳（史跡）」などの特徴ある自然環境の上で築かれた歴史文化の表象ともいえるべきものがあります。

これらの文化財に指定・登録されている地域資源は、大地が育んだ自然環境そのものや、その自然と共存してきた人々が育んだ歴史文化の表象だと言えます。地域資源の保存を軸として指定・登録されてきたこれらの文化財は、今後持続可能な形で活用されることにより、その価値をさらに高めることが可能となります。

◆文化財以外の地域資源

文化財として指定・登録されていない地域資源も数多くあり、それらも地理的条件や特徴的な自然環境の上で築かれてきました。

山間部の傾斜地で特筆するべき一つとして、特有の傾斜地農業があります。地すべり地形を活用して形成された傾斜地集落では、傾斜地地形をそのまま活用した農業方法、特徴的な農作物の栽培などが継承されてきました。三好地域の傾斜地畑は、特徴的な地質（岩石の種類や地質構造）の影響により、水はけの良いことが特徴です。そのため、ソバなどの雑穀、じゃがいも、こんにゃく芋、お茶などの作物が栽培されており、郷土料理や名産品として知られています。

一方、池田町マチ・サラダや井川町辻などの平野部は、昭和前半ごろまで刻みたばこ産業で栄えた地域でした。この背景には、これらの地域が交通の要衝であったことと関係しています。山間部の水はけの良い地で育てられた葉たばこは、四国山地の尾根沿いを経て平野部に集積し、加工されたのです。刻みたばこで栄えた池田町マチ・サラダや井川町辻には、その当時に立てられた家屋や集積所跡などが残されています。刻みたばこを営んでいた事業者は現在、酒造業や醸造業などへ転業し、三好市の名産品を製造しています。

また大歩危小歩危付近の吉野川及び祖谷川沿いでは、非火山性の温泉・鉱泉が点在しています。1963年に祖谷温泉が開発されて以降、周辺に温泉・鉱泉が次々と開発され、現在、四国山地内でも有名な温泉郷として知られています。

吉野川に関係する地域資源として、吉野川の浸水で運ばれた砂泥を利用して栄えた瓦産業、昭和の中頃まで続いた吉野川の水運文化（渡し場、川港跡）やラフティングやウェイクボードなどのウォータースポーツなどがあります。

このように、当地域には山間部や平野で多様な地域資源が点在しており、その多くは急峻な地形や河川流路などの大地の変動と密接に関係して築かれたものです。今後これらの地域資源を継承していくためには、地域住民や当地域に関わる多くの人々がその付加価値を理解した上で正しく保全し、持続可能な形で活用し続けることが必須です。

③ 産業

◆産業構造

当地域の主な産業として、第一次産業では農林業、第二次産業では建設業と製造業、第三次産業では卸売業、医療・福祉関係、宿泊業、飲食サービス業、複合サービス事業などがあります。産業国勢調査の結果によると、当地域の産業分類別就業人口は減少傾向にあり、2015年には18,615人（三好市11,589人、東みよし町7,025人）です。人口減少の

要因として、少子高齢化が進んでいることが原因として考えられており、2005年と比較すると3,041人（14%）減少しています。

大分類別でみると、第1次産業と第2次産業における減少が著しい状況です。第1次産業は613人（30.6%）、第2次産業は1,536人（24.4%）の大幅な減少傾向を示しています。

【第一次産業】

当地域の民有林率は87%であり、第一次産業の林業については、山城町や三野町を中心に盛んです。もともと当地域は、広葉樹薪炭生産やたばこ栽培を中心とした産業が盛んでしたが時代を追うごとに衰退し、現在では、第二次世界大戦後の拡大造林期に植林されたスギ・ヒノキを活用した林業が山間部での産業の一つとなっています。一方で農業は、傾斜地の水はけの良い土壌を活用した農作物であるソバ・ゼンマイ・果樹・茶など、平野では米・果樹などが栽培されています。傾斜地で栽培された農作物については、「祖谷そば」、「でこまわし」、「ひらら焼」などの郷土料理として代々継承されてきました。第1次産業のなかでも林業就業人口については増加傾向にありますが、農業就業人口については大幅に減少しています。2015年における販売農家数は1,002戸（三好市495戸、東みよし町507戸）、農業就業人口（自営農業に主に従事した人）は1,564人（三好市790人、東みよし町774人）で高齢化率は71.6%であり、2005年と比較して4割減少しており、農業の後継者不足や担い手不足が数字に顕著に表れています。とりわけ、山間部で継承されている傾斜地農法については、一つあたりの畑の面積が狭く、耕運機などの機械の入りにくい急峻な地であるという特徴があるため、多くの生産量は望めず、また大きな労働力を確保することが難しい状況です。しかしながら、栽培された農作物に当地域の地形や自然を活用した付加価値を与え、ブランド化を図ることによって、他地域の農産品との差別化が可能となります。

【第二次産業】

第二次産業の従業者数については、土木業を中心とした建設業、食料品製造業や製材業などの製造業が9割以上を占めています。建設業と製造業の割合はほぼ半々です。その理由として、当地域は斜面災害などが頻繁に発生する地域であり、集落をつなぐ道路や河川などの公共整備事業が頻繁に行われることが挙げられます。しかしながら、建設業就業人口は年々減少傾向を示しており、2005年から2015年の10年間で建設

業従業者数が4割近く減少しています。道路や河川などの公共事業が減衰されつつあり、今後当地域内、とりわけ傾斜地集落で暮らし続けていくことの大きな課題となっています。

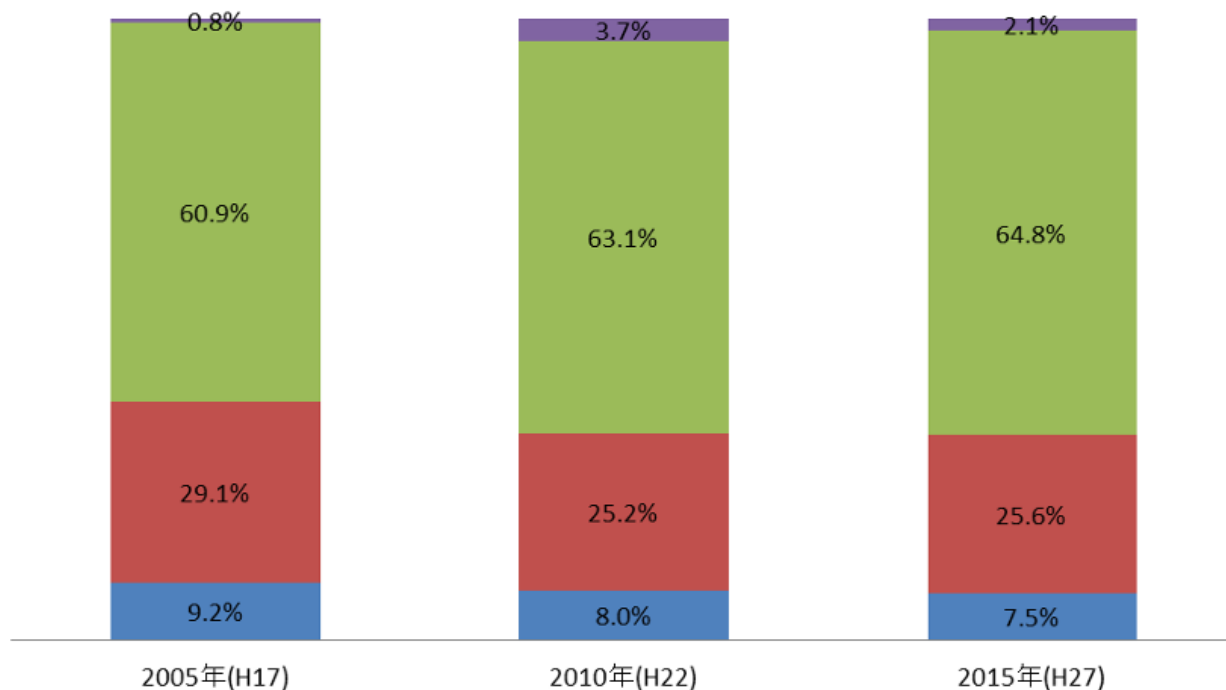
【第三次産業】

2014年の第三次産業の大分類従業者数は、医療・福祉関係が最も多く全体の28.9%程度、次に卸売業・小売業が18.6%、次いでサービス業8.7%、そして宿泊業・飲食サービス業が8.5%となっています。2005年のデータと比較して、従業者数が増えていて割合が高い分類としては、医療・福祉関係(24%増)と宿泊業・飲食サービス業(2%増)のみとなっています。

当地域は、県内でも有数の観光地である大歩危小歩危、急峻な地形が作り出す雲海（八合霧）、吉野川をはじめとする深い渓谷など特有の自然環境に恵まれています。また、大歩危小歩危と並ぶ観光地である祖谷のかずら橋をはじめ、傾斜地で栽培される特徴ある農作物、妖怪話やたぬき話をはじめとする口頭伝承など、自然環境と密接に関係した生活文化が色濃く遺っています。当地域での宿泊業・飲食サービス業は、これらの地域資源の恩恵をうまく活用しながら事業展開しています。

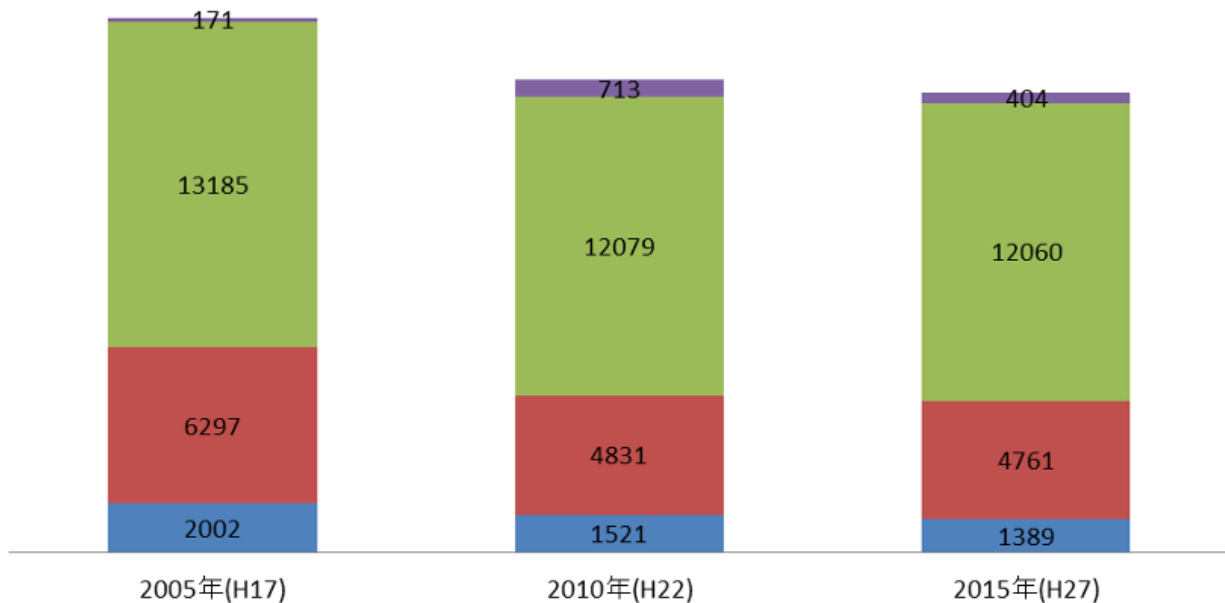
産業分類別就業者割合の推移

■1次産業 ■2次産業 ■3次産業 ■分類不能



産業分類別就業者人口の推移

■ 1次産業 ■ 2次産業 ■ 3次産業 ■ 分類不能



◆地域資源の産業への活用について

当地域には、四国山地や讃岐山脈、そして吉野川水系に関わる多様な自然環境が存在しています。これらの特徴ある自然環境を保つべく、剣山系を源とする祖谷川の源流から吉野川中上流域までの広域にわたる「剣山国定公園」、香川県境一帯に広がる「箸蔵県立自然公園」などの自然公園があります。さらに地質鉱物関係の文化財として、国指定天然記念物および名勝「大歩危小歩危」、県指定天然記念物「美濃田の淵」や「太刀野の中央構造線」や「祖谷、三名の含礫片岩」などがあります。また、国指定天然記念物「三嶺・天狗塚のミヤマクマザサ及びコメツツジ群落」や「加茂の大クス」、県指定の「黒沢の湿原植物群落」など特色ある生態系、「祖谷の蔓橋」や「東祖谷山落合」、「西祖谷の神代踊」などの歴史文化遺産も文化財として国指定されています。また、自然公園や文化財等に指定されていない地域資源も多数あり、急峻な地形の上で伝承されてきた妖怪伝説、大歩危小歩危や祖谷に点在する鉱泉・温泉、池田町マチ・サラダや井川町辻の平野部で繁栄した刻みたばこ産業の遺構などがあります。最近では、吉野川の激流・静水面を活用したウォータースポーツなどが盛んです。加えて落合集落をはじめとする東祖谷地区の傾斜地集落では、古民家を活用した宿泊施設があります。さ

らには、傾斜地斜面で継承されてきた農法（傾斜地農法）は、2018年3月に世界農業遺産に認定されています。

こうした多種多様の地域資源は主に第一次産業や第三次産業の中で活用され、当地域特有のツーリズムへと活かされてきました。とりわけ近年（2008年頃）から、大歩危小歩危、祖谷地区周辺のインバウンド観光誘客に向けた活動が推進されています。

◆近年の観光入込数について

当地域（三好市エリア）の近年の観光入込数は年間80万人前後※¹であり、宿泊者数は2013年以降増加の傾向が続いています※²。観光客の最も多い観光スポットは祖谷のかずら橋であり、2019年度には約37万人が来訪し、2011年度より19%増加しています。祖谷のかずら橋の2019年度の渡橋者数は、2011年度と比べ、約2割増えています。観光客数の増加を支えているのが外国人観光客の急増です。2019年度の外国人のかずら橋の渡橋者数は2011年度と比較すると12倍を超えており、2019年度で見ると、渡橋者数全体の15%が外国人観光客となっています。これは、祖谷・大歩危地区が日本の山間部の原風景として、欧米諸国やアジア圏では中国、香港、台湾を中心とした旅行客に人気であることが影響しているためです。このように、特徴的な風景が作られた背景には、大地やそれと共存して育まれた人の営みが密接に関係しています。

＜当地域のツーリズムの課題と今後について＞

現在の当地域のツーリズムは、大歩危小歩危、祖谷地区などの急峻な地形上で継承されてきた歴史文化を中心に展開され、これらは屈指の観光地名勝地として知られる存在となりました。また、美濃田の淵には隣接して高速道路のサービスエリアである吉野川ハイウェイオアシスなどが築かれました。それを可能にしたのは、①大歩危小歩危、美濃田の淵、祖谷地区という地域の土台を作り出した特有の地形や気象、②他地域にアクセスしづらい環境がもたらした特有の伝統文化の継承、③特有の自然環境や歴史文化のオリジナリティーに気づき、地域外に発信し続けてきた人々の活動の3つの要素です。しかしながら現在、人口減少やそれに付随する継承文化・産業の担い手不足に直面しており、長きにわたり培われてきた歴史文化も少しずつ失われつつあります。

もちろんこれらの地区以外でも、地形に密接に関係した歴史文化が育まれてきました。しかしながら、その特徴を継承する人材の育成や継承

していくための手法が十分ではなく、ツーリズムに関して当地域内での地区ごとに隔たりが生じ、「三好全体の特徴（＝三好らしさ）」を十分に打ち出せていません。

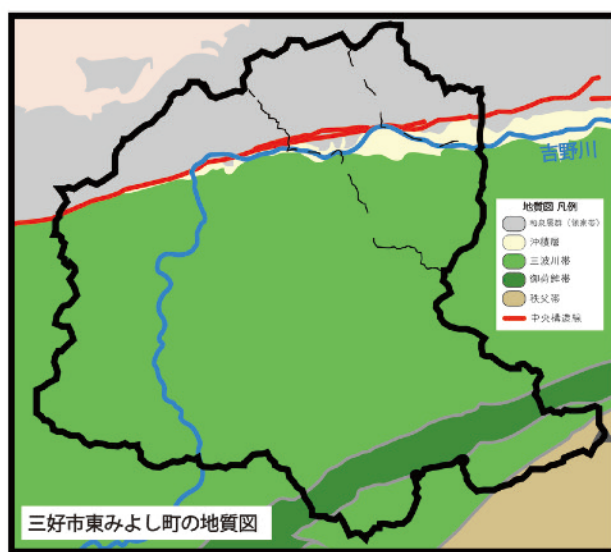
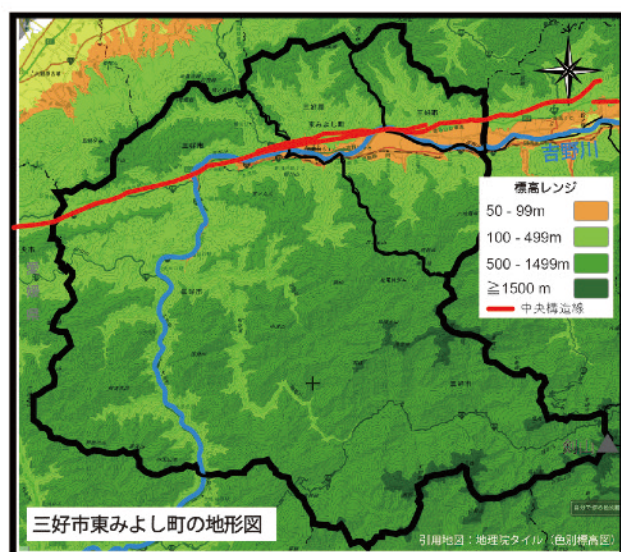
当地域らしい持続可能な地域社会を構築するためには、ツーリズムの推進（＝地域資源の持続可能な活用）は欠かすことができません。これまで受け継がれたこの地にしかない歴史文化や自然環境を、地域全体で活かし続けていく手法としてジオパークを活用することにより、大地をベースとした自然、先人が育んだ歴史文化、現代の人々の生活様式、そして自然と共存し続ける未来の地域社会をも包括し全てを見据えた「自然や歴史文化の恩恵に感謝しつつ、大地と共に生きぬいていく」ことに取り組んでいきたいと考えています。

※1) 2011年から2019年までの三好市役所産業観光部の市有観光施設
入込客数データ

※2) にし阿波観光圏 徳島県観光動態調査

三好ジオパークの大地と 生き物と歴史文化の成り立ち

多様な地質からなる三好の大地には、約3億年前から現在までの地球活動の記録が残っています。約3億年前の浅い海底で息づいていた生物の痕跡をはじめ、2～1億年前に海底に堆積した堆積物や火山噴出物が地下十数kmに運ばれ生まれ変わったもの、そして約7500万年前の海盆の堆積物や、そこに息づいていた生物たちの痕跡などがあります。それらは、約300万年前から始まった北西方向へのフィリピン海プレート^{*1}の沈み込みに伴い隆起した四国山地や“大地の切れ目”中央構造線の活動に伴い隆起した讃岐山脈の構成物として存在しています。さらに、讃岐山脈の隆起に伴い吉野川の流路は変更し、吉野川流域の平野部形成などにも大きな影響を与えました。このような特徴的な三好の大地の上では、地質地形的特徴を活用した暮らしが営まれています。



この特徴的な三好の大地の成り立ちを、三好ジオパークでは以下6つのSCENEに分け、これら各々のシーンが感じられる箇所を「サイト」として紹介します。

SCENEⅠ：四国山地（北側）の素ができる時代（海底に噴火し、たまり、プレート運動で地下へ運ばれ、圧力を受ける時代）

SCENEⅡ：四国山地ができる時代（山地の隆起）

SCENEⅢ：讃岐山脈の素ができる時代

SCENEⅣ：讃岐山脈が盛り上がり始める時代

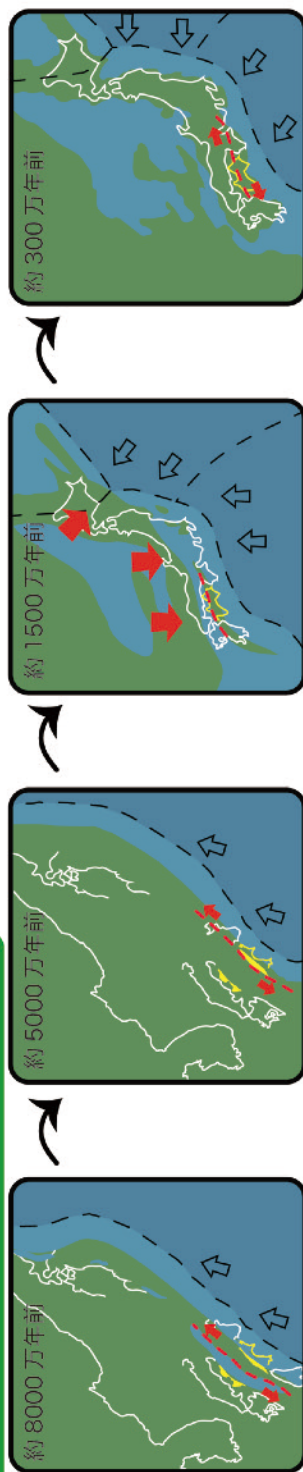
SCENEⅤ：吉野川沿いに平野が作られる時代

SCENEⅥ：大地と共存しながら生きぬく時代（現代）

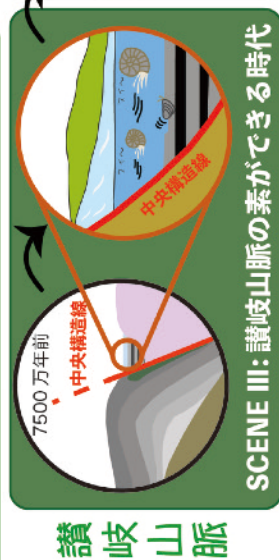
SCENEⅠからⅤまでは全て「ジオサイト」として紹介しています。ジオサイトは、三好地域の大地の成り立ちを感じられる特徴ある地質・地形がある箇所です。

SCENEⅥは「エコサイト」と「カルチュラルサイト」として紹介しています。エコサイトは、三好地域の大地と関わりのある生物や生態系が観られる箇所のことで、カルチュラルサイトは、三好地域の大地と関わりのある歴史文化を感じられる箇所のことです。

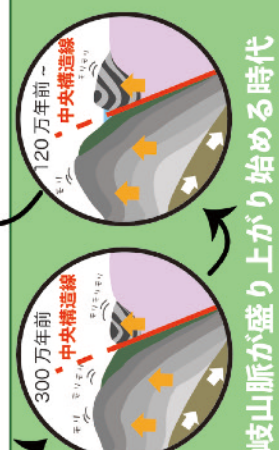
日本列島ができるまで



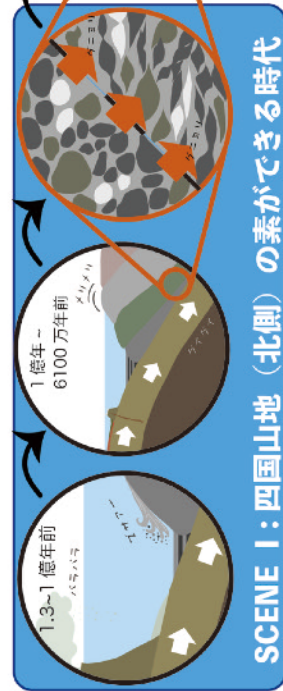
三好の大池ができるまで



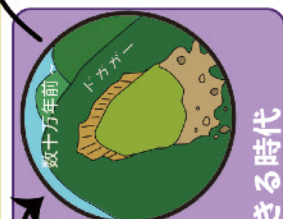
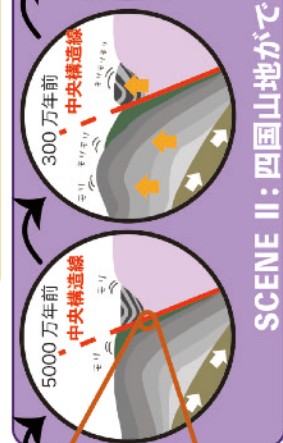
讃岐山脈



流れになるまで
吉野川が今の



四国山地



SCENE I: 四国山地（北側）の素ができる時代

三好の北域をほぼ東西に貫く”大地の切れ目”こと中央構造線。これより南側の大地では、約3億年前から7000万年前までの段階的な海底の様子が岩石中に保持されています。これらの岩石は、海洋プレートの運動により大陸プレート境界まで運ばれ、大陸プレートの下に沈み込み、地下十数kmで圧力を受けました。それらの過程を3つの地質帯の岩石から伺うことができます。

三好の南東部には、西日本で第2の高峰、剣山があります。この付近は秩父帯^{*2}と呼ばれる地質帯から成り、約3億年前（古生代前期ペルム紀^{*3}）の礁(しょう)の痕跡である石灰岩、約2億4千万年前の放散虫(ほうさんちゅう)^{*4}・コノドント^{*5}などを含んだチャート^{*6}、2億年前～1億6000万年前の放散虫を含んだ泥岩などから構成されています。剣山山頂にある大劔（おおつるぎ）神社付近には、石灰岩露頭が現れています。

秩父帯（秩父北帯）の北側には、三波川帯(さんばがわたい)^{*7}と呼ばれる地質帯が分布しています。この地を構成している岩石はもともと、海底に噴出した溶岩や火山灰、大陸で削られ海底に運搬された礫・砂・泥^{*8}の堆積物です。海底に堆積・噴出した年代は、1億3000万年前以前のものや9000～7000万年前のものがあります。その後、これらの岩石はプレートの運動によってアジア大陸の東縁まで運ばれ、大陸プレートの下に沈み込み、地下十数kmで圧力を受けて、結晶片岩^{*9}という岩石に生まれ変わりました。結晶片岩には、祖谷溪や大歩危で見られる含礫片岩(がんれきへんがん)や砂質片岩、チャートが結晶片岩となった紅(こう)レン石片岩(せきへんがん)、泥岩が結晶片岩となった泥質片岩、そして”阿波の青石”として親しみのある緑色片岩などがあります。

三波川帯の南縁付近には、御荷鉾帯(みかぶたい)^{*10}と呼ばれる狭小の地質帯があります。この地で観られる緑色岩類(りよくしょくがんるい)は、約1億5000万年前に地球深部から海底へ噴出した溶岩の塊で、海台を作り出していました。この溶岩から成る海台も、海洋プレートの沈み込み運動によって地下に運ばれ、圧力を受け、緑色岩という岩石に生まれ変わりました。

このように、約3億年前から7000万年前までの断片的な時代の海底の様子、そしてプレート運動によってこれらの岩石が地下で圧力を受

け、結晶片岩として生まれ変わった姿などを様々なジオサイトを通して観ることができます。



SCENE I

「四国山地（北側）の素ができる時代」のサイト例

三名の含レキ片岩サイト

三波川帯の中でも礫質片岩を観察できる箇所は稀であるが、大歩危から祖谷溪では、南北幅十数 m の礫質片岩が観られる。様々な種類の大きな礫が地下で圧力を受けて引き伸ばされている様子を肉眼でも観察できる。

SCENE II: 四国山地ができる時代

SCENE II は、地下で圧力を受けて生まれ変わった岩石たちが、地下から地表に隆起し、四国山地をつくり出す時代です。

約6000万年前に中央構造線に沿って地下十数kmから上昇してきた三波川帯の結晶片岩類は、5000万年前までには地表に現れました。また、1400万年前ごろに引き起こされた四国地下での火成活動に伴い、四国の最高峰である石鎚山付近でコールドロン（カルデラの一種）が形成しました。これらの活動によって、四国の内陸部に、ある程度の高さの山地が形成されたと考えられています。

現在のような高さの四国山地に至るには、もう一つダイナミックな大地のイベントが寄与しています。それは約300万年前に起こった、「フィリピン海プレートの沈み込み方向の変化」です。約300万年前に北方向へ沈み込んでいたフィリピン海プレートが、日本列島の東西方向の圧縮の影響を受け、北西方向へ沈み込むようになりました。この影響を受けて四国山地はさらに隆起し、かつ侵食作用を受けて、現在の急峻な地形が作り出されました。

これらの隆起の記録は、大歩危小歩危の背斜構造(はいしゃこうぞう)*¹¹、獅子岩、ポットホール*¹²などで観察することができます。また急激な隆起により、四国山地内、とりわけ結晶片岩類からなる大地では、地すべりをはじめとする斜面崩壊が発達し、これらは現在の傾斜地集落が築かれる緩斜面の礎となりました。



SCENE II

「四国山地ができる時代」のサイト例

ひの字溪谷サイト

祖谷川が北流するエリア「祖谷溪」は、硬質の砂質・礫質片岩からなる。これらは垂直方向の節理面にそって割れる特性があり、祖谷溪の急峻な地形を作り出す要因となっている。また、この硬質な岩盤を蛇行して流れている箇所が「ひの字溪谷」である。

SCENE III: 讃岐山脈の素ができる時代

現在中央構造線の北側の讃岐山脈は、主に砂岩と泥岩が積み重なってできた地層から成り、その分布は東西方向に広がっています。

中央構造線の運動方向は、その時々プレート運動^{*13}に影響を受けて変化してきました。今の讃岐山脈のあるエリアは、約7500万年前には中央構造線の左横ずれ運動によって海盆が形成され、陸から侵食・運搬されてきた砂や泥がこの海底に堆積していました。そしてこの海には、海洋生物やその這い跡などの生活の痕跡も数多く残されました。

この海底の痕跡は、池田ダムの砂岩と泥岩の地層や下野呂内河床にある生痕化石(せいこんかせき)^{*14}など、多くの箇所で観察することができます。

SCENE IV: 讃岐山脈が盛り上がり始めた時代

現在の中央構造線の活動方向は、右横ずれ運動（数m）と北に大地が隆起する（数十cm）運動（逆断層運動）が合わさったものです。これは約300万年前から開始した、フィリピン海プレートのユーラシアプレート^{*15}下への北西方向の沈み込みと、日本列島の東西圧縮が要因で

す。この活動が、現在の三好の北域にある讃岐山脈やその周辺の地形に大きな影響を与えました。

約300万年前から活発になった現在の中央構造線の断層運動により、その北側に位置していた砂岩と泥岩の積み重なった地層から成る大地が隆起し始め、徐々に讃岐山脈を作り上げていきました。讃岐山脈が盛り上がりつつあった約120万年前までは、吉野川は大歩危からそのまま北流し、現在の香川県三豊市を通り、瀬戸内に流れ込んでいました。

讃岐山脈の隆起の要因となった中央構造線の中で、三好地域で現在見られる活断層^{*16}系は池田断層や箸蔵断層や三野断層などがあります。また、それらに付随する断層（三野町の芝生衝上断層(しばうしょうじょうだんそう)^{*17}）も観られます。



SCENE IV

「讃岐山脈が盛り上がり始めた時代」のサイト例

池田断層 断層崖サイト

池田市街地の低位段丘面には、ほぼ東西方向に連なる明瞭な低断層崖が観察できる。これは、池田断層（中央構造線）の活動が何度も起こりできた断層崖で高さは20~30mである。日本列島を代表する典型的な低断層崖である。

SCENE V: 吉野川沿いに平野が作られる時代

約120万年前、讃岐山脈が当時の吉野川の北流を防ぐほど高く隆起したため、吉野川は池田町付近で東流し始め、それより下流側に平野が形成しはじめました。また讃岐山脈の急激な隆起は、讃岐山脈の南麓の地すべりを発達させる要因にもなりました。

讃岐山脈の隆起は、吉野川北岸の平野形成に拍車をかけました。讃岐山脈の隆起に伴って平地に土砂が供給されることで扇状地が発達し、水はけの良い地が吉野川北岸平野部に広がりました。

讃岐山脈の隆起にともない形成された地すべり地形は、池田町馬場・西山地区、シンヤマ地区などで観察できます。そして、扇状地地形は三野町の平野部（芝生・勢力・清水地区など）で、吉野川の東流に伴い形

成された河成段丘は、池田町、東みよし町（旧三好町、旧三加茂町）、三野町、井川町辻などで観ることができます。



SCENE V

「吉野川沿いに平野が作られる時代」のサイト例

王地の扇状地サイト

王地扇状地は小規模であるが、徳島県内では最も形の整った扇状地である。扇頂部に紅葉温泉、扇央の乾燥地に畑、扇端に湧水があって集落が立地するという利用形態も教科書的である。

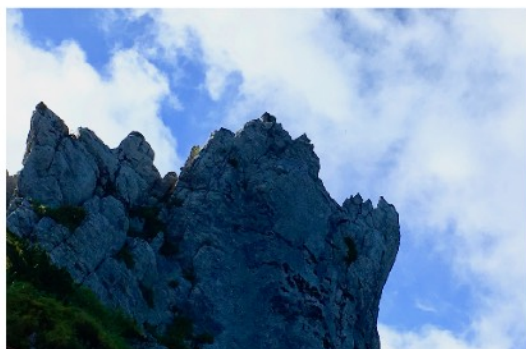
SCENE VI: 大地と共存しながら生きぬく時代

上記のような過程で形成した三好の大地の上では、特有の地質・地形と共存しながら生きぬいてきた生態系や人々の歴史文化が育まれてきました。

特有の生物や生態系の一例として、溪流沿い植物があり、増水を頻繁に繰り返す吉野川の溪流沿いに細葉化や小型化して蔓延り、厳しい溪流地で生育してきました。また、西日本第二の高峰である剣山山頂付近の脊梁部は、標高が高く亜寒帯の気候を示すため、それに応じた植生が見られます。さらに、風を避けるために背丈の低い樹木や草原も広がっています。

特徴ある大地の上で築かれてきた歴史文化にも特徴があります。例えば、急峻な四国山地の斜面で多発した地すべりは緩斜面を生み出し、この地特有の集落（傾斜地集落）の土台となりました。傾斜地集落では、家屋の建築様式や口承伝承や農法など、急峻な土地で暮らしていくための多様な知恵と工夫が育まれました。また、吉野川の平野が築かれ始めるのも、この三好ジオパークの歴史文化で大事なポイントです。平地の中でも池田町や井川町辻地区では刻みたばこ産業の一大集積地として繁栄し、吉野川の水運文化を活用した暮らしが営まれました。また、吉野川流域平野部の古代の生活文化の痕跡として、原始・古代から中世・近世に至る生活文化の痕跡として遺跡も数多く見られます。

このように、特有の大地の上で培われた特有の生態系・生物はエコサイトとして、特有の大地の上で築かれた歴史文化はカルチュラルサイトで各々観ることができます。



SCENE VI

「大地と共存しながら生きぬく時代」のサイト例

剣山山頂 御塔石サイト

西日本で2番目に高峰、剣山。その山頂付近にある大劔神社には御神体「御塔石（おとういし）」がある。御塔石を始めこの周辺の岩石は石灰岩からなり、約3億年前の暖かく浅い海に生息していた生物が石化したものである。



SCENE VI

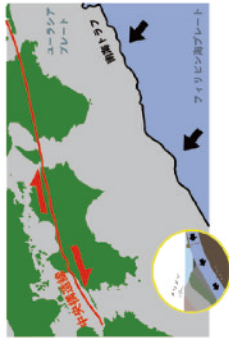
「大地と共存しながら生きぬく時代」のサイト例

落合集落サイト

「東祖谷山村落合」として国の重要伝統的建造物群に選定されている集落で、比高差約390m広さ32.3haある。過去の地すべり地の上に築かれている集落の一つで、泥質片岩からなる。

用語集

1. フィリピン海プレート



約 5200 万年前に誕生した海洋プレートで、四国（ユーラシアプレート）の南に広がっている。現在は北西方向（四国方向）へ向かって 4～5cm/年 水平方向に移動し、ユーラシアプレートと接（衝突）し、ユーラシアプレートの下へ沈み込んでいる。ユーラシアプレートとの境界は南海トラフである。この沈み込みによって、約 100 年に一度、海溝型の地震（東海地震、東南海地震、南海地震）が引き起こされている。

5. コノドント



※コノドントイメージは国立科学博物館 HP より引用

ラテン語で「円錐状の歯」の意味を持つ「コノドント」は、カンブリア紀（約 5 億年前後）～三畳紀（約 2.5 億年前後）の海に生息していた生物で、顎のない骨格を持った魚類の一種。

2. 秩父帯



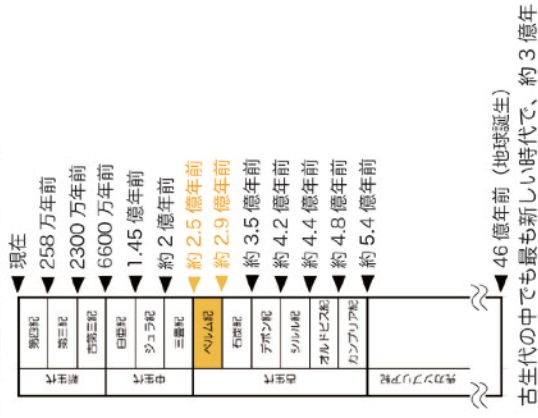
西南日本の地質帯の中で、中央構造線より南側に位置する地質帯の一つ。東西南方向に分布し、北側の三波川帯と南側の四万十帯の間に位置する。海底堆積物や海底火山や生物由来の堆積岩などがプレート運動によって運ばれ、大陸プレートに付加することによってできた。構成される岩石や地質構造や年代などから、北帯、中帯、南帯に区分されるが、その中で当地域内の秩父帯は北帯にあたり、付加した時期は 2 億 5 千万年～1 億 5 千万年前くらいである。

6. チャート



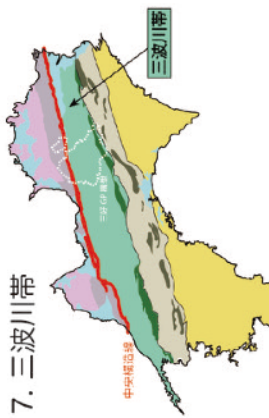
硬く緻密で珪質の堆積岩。放散虫の遺骸が降り積もり、石化することによって形成した。少量の粘土鉱物や鉄鉱物などによってチャートの色が決まる。チャートがプレート運動によって地下深くに運ばれ、圧力（＝変成作用）を受けると紅レン石片岩となる。

3. 古生代前期ペルム紀



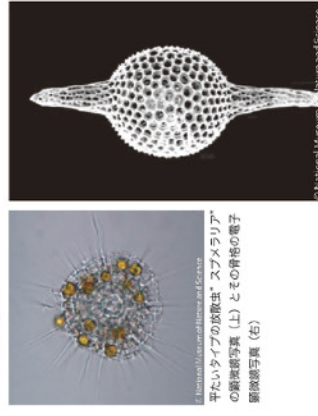
古生代の中でも最も新しい時代で、約 3 億年～2.5 億年前を示す。

7. 三波川帯



西南日本の地質帯の中で、中央構造線のすぐ南側に位置する地質帯。東西南方向に分布し、南側は秩父帯。当地域の三波川帯の南域には、御荷鉾帯が幅数 km で分布している。当地域の大地の大部分が三波川帯から成る。三波川帯は結晶片岩から構成されている。

4. 放散虫



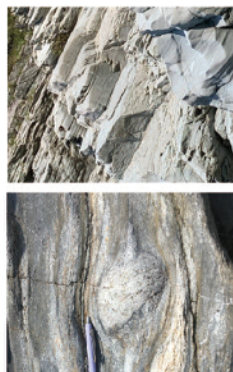
主に海洋に浮遊する原生生物の一種で単細胞生物（プランクトン）。原生生物とは、植物でも動物でも菌類でもない真核生物のこと。珪酸質からなる骨格を持っており、遺骸が海底に降り積もることによって石化し、チャートが形成する。

8. 礫・砂・泥



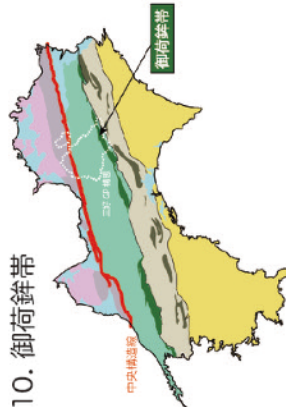
岩石の碎屑物のうち、粒径が 2mm より大きいものを礫、2mm～1/16mm の間の粒径のものを砂、1/16mm 未満の粒径のものを泥と呼ぶ。岩石の種類は関係ない。泥が多く堆積して石化したものが泥岩、砂が多く堆積して石化したものが砂岩、礫が多く堆積して石化したものが礫岩である。

9. 結晶片岩



海底堆積物や海底火山の噴出物や生物由来の堆積岩などがプレート運動によって運ばれ、大陸プレートに付加し、地下深くで圧力（＝変成作用）を受け、地下深くでできた岩石の総称。原岩（結晶片岩に生まれ変わる前の岩石）によって区分されることが多く、紅レン石片岩の原岩はチャート、緑色片岩の原岩は火山噴出物、泥質片岩の原岩は泥岩、などである。当地域の山肌や河川沿いで見られる結晶片岩は、地下十数 km の領域で編成し、隆起したものである。

10. 御荷鉾帯



三波川帯の南域に位置する。当地域では、東祖谷山の谷道川沿い周辺、久保隆周辺、塔丸周辺に分布している。1 億 5000 万年前前後に海底に噴出したマグマ（火成岩）が地下深くで圧力（変成作用）を受けてできた岩石である。

11. 背斜構造



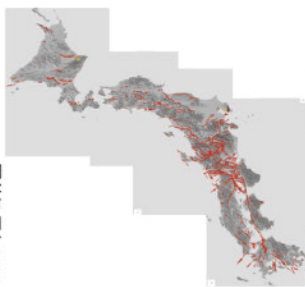
褶曲の一種。積み重なった地層が、上に凸になるようにたわむことでできる地質構造。吉野川沿いには、いくつか褶曲を見ることができ、なかでも有名なものが、大歩危峡にある数 km 規模の背斜構造である。

12. ポットホール



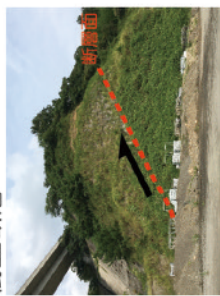
罅穴ともいう。水流によって運ばれた小石が岩盤の窪みにもたらされ、削られることになってできる円形の穴。水流の激しいところ（河川や海など）でしばしば見られる。

16. 活断層



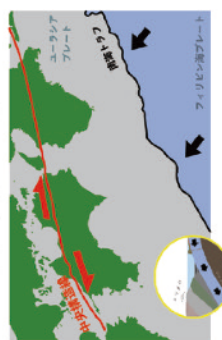
260 万年～数十万年前以降に繰り返し活動し、将来も活動すると考えられている断層のこと。地表に現れていない活断層も多くあると考えられている。

17. 衝上断層



断層運動によって、断層の上側のブロック（上盤）が下側のブロック（下盤）の上をずりあげることによって形成される、緩やかな傾斜（45 度以下）を持つ逆断層。低角逆断層ともいわれる。

15. ユーラシアプレート



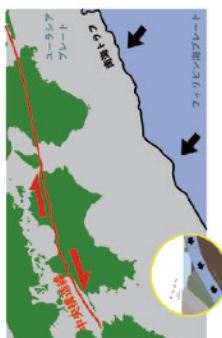
現在の地球表層にあるプレートの中の一つで、大西洋北東部分～ユーラシア大陸～西日本～東南アジア域を含む大規模な大陸プレート。日本近辺のユーラシアプレートはフィリピン海プレートおよび北米プレートと接している。フィリピン海プレートとユーラシアプレートとの境界部分は南海トラフと呼ばれる。

14. 生痕化石



地層の中や化石の中に古生物（昔、生きていた生物）の生活の痕跡が化石となったもの。堆積岩中で見られる。

13. プレート運動



現在地球表層上には十数枚のプレートが覆っており、これらは、大きく海洋プレートと大陸プレートに区分される。地球表面上の主なプレート運動として、海洋プレートの誕生（海嶺）、地球表層での海洋プレートの水平移動、他のプレートとの衝突（収束）および海洋地球深部への沈み込みが挙げられる。プレート運動の要因は、地球表層部と深部の熱交換（対流）である。この運動によって、プレート衝突（収束）域では造山運動が起こり、海溝型地震などが周期的に発生する。

三好ジオパークの活動経過

三好ジオパークの活動は、2017年4月1日より開始し、地域の方々と共にジオパーク活動を展開してきましたが、より活動を深化させるために、民間・行政・学術機関などからなる組織「三好ジオパーク構想推進協議会」を2020年5月10日に発足しました。（2024年10月9日「三好ジオパーク推進協議会」に名称変更）

現在、推進協議会では価値ある地域資源のつながりをより深く理解し、広げるための活動を推進するため、議論をしながら持続可能な地域社会の実現を目指して活動を展開しています。
これまでの主な活動は次のとおりです。

1. 普及啓発・広報活動

三好ジオパークの理念や仕組み、当地域の特徴ある地質地形、そしてそれらとのかかわりのある地域資源についてみんなで理解を深めるため、専門員や研究者による講演会や、地域みんなで催すジオカフェ、市報記事掲載などを通して普及啓発活動を行っています。

地域みんながよりジオパーク活動に深くかかわるためのメール情報便「ジオだより」が開設しました。ジオだよりではイベントの告知や、会報誌である「ジオジオてーきびん」の発行を行っており、様々な三好ジオパークの取り組みや情報を知ることができるようになりました。また、日本ジオパーク認定申請に向けての気運を高めるために「ジオパーク認定を目指す」というノボリや横断幕を掲示して、視覚的にもジオパーク活動を取組む地域であることが解るようにしています。

来訪者に向けての広報活動としては、ガイドブックを作成し配布したり、ホームページ、SNS、動画投稿サイトなどでの情報発信をしたり、三好ジオパーク情報発信室「とこじお」での各種展示などを通して広報活動を行っています。

2. 教育振興活動

.....

学校教育現場では、小中学校へのジオパーク出前授業、池田高等学校探求科へのジオパーク学習サポート、小中学校教職員に向けた研修事業「三好教育みらい塾」でのジオパーク研修など展開してきています。当初は専門員による授業がほとんどでしたが、近年では専門員だけではなく地域のガイド組織や関係する行政機関と一緒に取り組むケースが増えており、地域みんなで協力し、大地（ジオ）の特徴を伝える取り組みを行っています。また、ジオパーク出前授業を経験した教職員の人事異動に伴い、これまでにジオパーク出前授業を取り入れていなかった学校においても開催されるようになり、学校現場でのジオパーク学習は広がりをみせているところです。

地域においてのジオパーク教育としては、各種団体が主催する研修会などへで、三好の大地（ジオ）の特徴や、その上で育まれてきた歴史文化・生態系などを伝える取り組みを行っています。また、推進協議会員向けの研修として「SDGsとジオパーク」について学べる研修会なども行っています。

3. ジオツーリズムの推進

.....

ジオパーク発足までのジオツーリズムの課題の一つとして、ガイド組織に関する事柄がありました。その課題には、ガイドツアーの無い地域の存在、次世代のガイドの担い手、ガイド料金などの課題がありました。

これらの課題解決に取り組むために、当初は、ガイド本の改訂やガイド団体同士の研修会を開きました。最近では、各ガイドが意識しながら大地とのつながりを踏まえた説明を行なっています。

ガイド組織がない地域でのジオツアーを構築するために、2018年12月に「みよしジオガイドの会」が発足し活動をスタートしました。既存のガイド団体のガイドツアーにあわせ、みよしジオガイドの会や複数のガイド団体等が連携して作成した新規のガイドツアーが構築されたことにより、三好地域内6エリア（池田町・井川町・東みよし町（旧三好

町）・山城町・西祖谷山村・東祖谷）でガイドツアー行われるようになっていいます。各ガイド団体が協力し、エリア内を周遊できるようなコースの作成を目指し活動しています。

上記のガイド団体や新しくガイドになる人に向けた養成講座も展開しており、2018年度からは「三好市プチガイド養成講座」を、2019年度からは「ジオパークガイド養成講座」を開講しています。三好市プチガイド養成講座は、三好市の地域資源を説明できる人材の育成や、地域資源を知ってもらうことを目的としたものです。ジオパークガイド養成講座は、プチガイド養成講座を修了した方が、より実践的にジオパークを周遊させるガイドとして活躍できるための養成講座として開講しています。

ツーリストに向けての情報発信としては、ホームページやガイドブックの作成、三好のジオ情報が入手できる拠点施設として三好ジオパーク情報発信室「とこじお」を設置するなどしています。

◎三好ジオパーク構想推進協議会設立まで			
年度	各事業名	各イベント名	参加人数 (延べ)
2017	普及啓発活動	各種講座・講演会・ジオツアー(32回)	914
		ジオカフェ(4回)	66
		市報連載(2017年6月～2018年3月)	
	教育振興活動	小・中学校対象の出前授業(9回)	578
	ジオツーリズム推進	ガイド研修会(7回)	104
2018	普及啓発活動	各種講座・講演会・ジオツアー(27回)	1174
		ジオカフェ(4回)	64
		市報連載(各月)	
		メール便「ジオ便り」(8回)	
	教育振興活動	小・中学校対象の出前授業(12回)	328
	ジオツーリズム推進	ガイド研修会(2回)	
		ジオガイドツアー(10回) ※みよしジオガイドの会関係	80
		ガイド養成講座(10コマ×2回)	250
2019	普及啓発活動	各種講座・講演会・ジオツアー(28回)	898
		ジオカフェ(1回)	68
		市報連載(各月)	
		メール便「ジオ便り」(6回)	
	教育振興活動	小・中学校対象の出前授業(6回)	164
	ジオツーリズム推進	ガイド養成講座(6コマ×2回&9コマ)	292
		ジオガイドツアー(27回) ※みよしジオガイドの会関係	237
		ガイド研修会(8回)	
		三好ジオパーク構想Web開設	

◎三好ジオパーク構想推進協議会設立以降

年度	各事業名	各イベント名	参加人数 (延べ)
2020	普及啓発活動	各種講座・講演会・イベント(14回)	334
		ジオカフェ(1回)	16
		市報連載(各月)	
		メール便「ジオ便り」(8回)	
		動画配信サービス(9回)	
	教育振興活動	小・中・高等学校対象の出前授業等(14回)	90
	ジオツーリズム推進	ガイド養成講座(6コマ&7コマ)	615
		ジオガイドツアー(44回) ※みよしジオガイドの会関係	376
		ガイドブック作成(10,000部)	
		ポスター作成(100枚)	
	推進協議会活動	総会(2回)、役員会(2回)、理事会(2回)、部会(12回)	
2021	普及啓発活動	各種講座・講演会・イベント(30回)	578
		ジオカフェ(2回)	28
		市報連載(各月)	
		メール便「ジオ便り」(9回)	
		SNS(283回)・動画配信サービス(1回)	
	教育振興活動	小・中・高等学校対象の出前授業等(14回)	351
		「SDGsとジオパーク」研修会(4回)	51
		三好ジオパーク構想絵本「ぼくは山」の発行(100冊)	
	ジオツーリズム推進	ガイド養成講座(6コマ&7コマ)	受講完了者35
		ジオガイドツアー(67回) ※みよしジオガイドの会関係	833
		情報発信室「とこじお」設置 ※人数は来場者アンケート回答数	298
		ポスター作成(200枚)	
	推進協議会活動	総会(1回)、役員会(2回)、理事会(1回)、部会(11回)	
2022	普及啓発活動	各種講座・講演会・イベント(22回)	721
		ジオカフェ(1回)	5
		市報連載(各月)	
		メール便「ジオ便り」(9回)	
		SNS(152回)・動画配信サービス(2回)	
		普及啓発用横断幕設置(4箇所)	
		普及啓発用ノボリ作成(650枚)	
	教育振興活動	小・中・高等学校対象の出前授業等(15回)	325
		「SDGsとジオパーク」研修会(4回)	64
		三好ジオパーク構想絵本「だんそうこわい」の発行(130冊)	
	ジオツーリズム推進	ガイド養成講座(6コマ&7コマ)	受講完了者18
		ジオガイドツアー(64回) ※みよしジオガイドの会関係	884
		情報発信室「とこじお」運営 ※人数は来場者アンケート回答数	604
	推進協議会活動	総会(2回)、役員会(2回)、理事会(1回)、部会(14回)	

普及啓発活動の一例



市民大学講座内でのジオパーク講座



長谷川先生と行く三好ジオツアー



ジオカフェ：溪流沿い植物を探しに行こう！



ジオカフェ：銅山川砂金採り体験



井内地区防災訓練時のジオパーク講座



防災ジオカフェ

教育振興活動の一例



池田高校生徒によるミニジオツアー



箸蔵小学校出前授業



山城中学校出前授業



池田城跡 石垣清掃

ジオツーリズムの推進の一例



プチガイド養成講座



ジオガイドによるジオツアー

三好ジオパークの基本計画

1. ビジョン

.....

ジオパークは地質地形遺産（ジオサイト）やそれらとのかかわりのある歴史文化・生態系を保全しながら、教育・防災・ツーリズムなどに活用し、地域の持続可能な発展を目指した活動を行うプログラムです。この趣旨に基づいて、私たち三好ジオパークのビジョンを次のとおり定め、特徴ある大地とともに持続可能な三好の地域社会を築き、さらにはこの地球の上で暮らしていくための活動を展開していきます。

三好の大地に根ざした暮らしを誇りに想い、生きぬき、未来へつなぐ

2. 三好ジオパークの活動方針

三好ジオパークのビジョンを私たちみんなで達成するために、7本の柱に基づいたジオパーク活動を展開します。7本柱の活動を織り混ぜながら推進することで、より地域社会の持続可能な発展を促せるものと考えています。

1. しる、まなぶ（教育活動）

三好の大地ってすごい！～楽しみながらわかる三好ジオ～

2. うる、もうける（ツーリズム活動）

三好の大地になんども来たい！～三好ジオツーリズムとリピーターづくり～

3. まもる、つなぐ（保全活動）

三好の大地の良さを守ろう！～未来へ繋いでいくための保全活動～

4. そなえ、いきぬく（防災活動）

三好の大地で生き抜く！～ジオパークを通じた防災文化づくり～

5. つたえ、つながる（広報活動・ネットワーク）

三好の大地を伝えつつ、様々な大地の特徴も知ろう！

6. さぐる、しらべる（調査研究活動）

三好の大地の新たな価値を探ろう！～ジオの宝を発掘し、付加価値を高める～

7. おしすすめる（推進体制づくり）

三好の大地の上でジオパーク活動をしよう！～地域愛醸成をつなぐ中核づくり～